傾城水滸伝　第十一編ノ壱　曲亭馬琴著　歌川国安画
天宝元年辛卯春正月吉日新板　江戸通油町書林鶴屋喜右衛門梓

▼：改頁　☆：未翻訳　□未校訂

さてもその後、幸目、狩倉姉妹は罪ならぬ咎に囚われて、厳しく牢屋に繋がれたる。この日領主の越後之介時秋は参勤の時が至って鎌倉に赴きつ、陣代鬣綿九郎の沙汰として彼女らに口を開かせず、盗人なりと決断して早その罪をぞ定めける。故あるかな綿九郎は脛坂毛太夫の婿にして妻は毛源太の妹なりければ、毛太夫親子はこの時に古き恨みを返さんとて、綿九郎に物を贈って機密を囁いて頼みしかば、綿九郎はその意を得てかく取り計らう事なれば、哀れむべし幸目、狩倉は縄の切れたる釣瓶に等しくて弥勒の世まで引き上げられ、いずる瀬絶えて無かりけり。

さる程に姉妹は或る日方辺に人無き折にこれらの事を云いいでて、うち嘆くのみで栓方無ければ、いとど恨みに耐えざりける。ここに又、この越路の女牢屋の下司に照鷺と云う女あり。その声朗らかなりければ人あだ名して口笛の照鷺と呼びなしたり。この時の世の習いにて、彼女も又、武芸を好んで既に得たる所あり、且つその心様は正しくて男魂ある者なれば、此の度幸目、狩倉が無実の罪に囚われて命危うきを見て密かに哀れみ、ある日その姉妹に告げて云う様、

「その名は予て聞きながら今まで対面せし事なれば、未だ見知られざるならん。私は御身に縁ある新玉の刀自の従姉妹女にて照鷺と呼ばれる者なり。我が性武芸を好むにより女武者頭の早蕨の刀自の弟子になり、その大刀筋を受けはべり。しかるに御身姉妹は犯せる罪があるにあらねど、相手は陣代の縁者にて、且つ銭あれば思いのままに強いて盗人と云い立てたり。私はこの儀を知るにより一人心を苦しめて救わんとのみ思えども、この身の職分重からず、余所に語らう友も無ければ思いながらも黙止たり。もし願わしき事あれば何事まれ頼まれるべし。心隈無く宣いね」と云うに喜ぶ幸目、狩倉、

「さては御身は我々の兄嫁の従姉妹女なりし照鷺殿にてありしよな。既に御身に知られし如く、我々の親がこの世に在りし時、この地の女武者頭、早蕨の刀自の弟の紺太郎主を子分にして酒店をいださしたれば、彼の人は我々が為にはすなわち兄分なり。その酒店は程遠からぬ鹽沢の里に在り、相願うは早く彼の人夫婦に我々の事をしかじかと知らせたまえかし。彼の人が聞けばともかくもして我々を救うべし。この儀を頼み奉る」と云うに照鷺は▼頷いて、

「真にその紺太郎は商人なれども武芸を好んで力も人に優れたれば、人あだ名して摩利支天の紺太郎と呼びなしたり。その内方の新玉殿はすなわち私と従姉妹達にて、これも又、武芸を好みぬ。力は夫に等しかるべし。ここをもて世の人たたえて合砥礪の新玉と呼びなしたり。実にこの夫婦に語らえば、必ずその甲斐あるべきなり。さは」とて、やがて立ち別れ、鹽沢の紺太郎の酒店に赴いて主人夫婦に対面し、幸目、狩倉が無実の罪に囚われたりし事の元末、麓村の大庄屋脛坂毛太夫親子の悪巧み、陣代みか手綿九郎の非道の計らいの事までも一部始終を説き示す閑談数刻に及びしを紺太郎、新玉は聞きつつひどく驚き憂いて、

「彼の姉妹は去ぬる頃より久しく訪れ無かりしかども、世渡る業に暇無ければ訪わでありしと思いきや。かかる災いあらんとは良くこそ知らせたまいたれ。さればとて、今たち所に良き分別の出るにあらねば、御身はまず帰らせたまえ。我々夫婦が談合し謀り事を定めてこそ、彼の姉妹を救うべけれ」と云うに照鷺は頷いて、

「しからば私は宿所にまかって、吉相を待たんのみ。用事あれば忍びやかに云い越したまえかし。

なおざりにして日を過ぐせば、轍鮒を枯魚の市に問う※、後悔あらんも計り難かり。よくしたまえ」と期を押して暇乞いして出て行きけり。

※轍鮒を枯魚の市に訪う（てっぷをこぎょのいちにとう）：危急・困窮が迫っている時に、救いの手を躊躇えば、後で救おうと努力しても甲斐はない。

　その時摩利支天紺太郎は妻の新玉にうち向かい、
「そなたも予ねて知る如く幸目、狩倉の二親はすなわち我が親分にて、この地に店を開けし折に店受け人になられし上に元手も多く恵まれたる恩義を思えば、命に掛けて彼の姉妹を救わずば何をもて人と云われん。然はあれども理をもって、彼の毛太夫の訴えに勝たん事はいと難かり。所詮牢屋を脅かして彼の姉妹を奪い取り、共に他郷へ走るべし」と云うに新玉は小膝を進めて、
「その儀真にしかるべし。今宵彼処に忍び入り、互いに運を試さんのみ」と云うを紺太郎は押し止めて、
「そなたはなどて了見無きや。領主は今年在鎌倉にて、この地に兵多からずとも獄卒ばかりも五六十人が日夜牢屋の辺に在るべし。しかるを我々夫婦両人が彼処に忍び入ればとて、いかにして本意を遂ぐべき。人をば救わで身を殺せば、又、何の益がある。軽々しく逸るべからず。我思うに当国魚沼郡の小千谷の里に頼もしき二人の勇婦あり。是はこれ叔母姪にて、その叔母を百林の古雛と呼びなしつ、姪は川社の雛形これなり。そもそもその勇婦らは城の太郎の叔母なりける板額の余類にて万夫不当の勇力あり。武芸も又、世の常ならず、先に城は滅亡して板額が囚われたりし頃、二人は民間に跡を埋めて▼つつが無き事を得たり。ここをもて夏は縮み、麻の仲買いをして世を渡り、冬は手下の狩り人に元手を貸して鳥を捕らせ、自らも又、殺生してその利を得る事少なからず。その武芸を好むにより、我らと親しきのみならず我が母方の親族なれば心様もよく知れり。そなたも予ねて知る人なれば、此は云わでもの事ながら我が分別を知らせん為に長物語りに及べるのみ。いでや古雛、雛形を密かにここへ呼び寄せて、談合して事を起こさん。逸るは要無き事にこそ」と云われて新玉は辺りを見返って、
「御身の了見その理あり。彼処へ使いを遣わして、さぁさぁ招きたまえかし」と云うを紺太郎は押し止めて、
「かかる密義を人伝てにて云い遣わさんは心元無し。我自ら行くべし」とて俄かに用意を調えて小千谷の里に赴いて、その次の日に古雛、雛形を伴って早くも帰り来にければ、新玉は忙わしく予て用意の酒肴を奥座敷に置き並べ、いと懇ろにもてなしけり。
　その時古雛、雛形は紺太郎夫婦に向かって、
「御身達の妹分の幸目、狩倉姉妹は我々も相知れり。急に牢屋を脅かし救い出さんと云う目論見は既にその意を得たれども、手を下して後は一日もこの地には居り難し。しからばまず予め落ち着く所を定め置かずば進退難儀に及ぶべし。されば当国を立ち退いて後ろ安くせんとならば、江鎮泊に赴いて彼の群れに入るにしく事無し。彼処の大将小蝶、大箱の両勇婦は三世姫に仕えまつって京鎌倉に従わず、数多の人馬を養ってよく人を容れる事は大海の如しと聞きにき。我々は彼の砦に年頃三人の知る人あり。そは呉藍の山桃、烏賊幟飛子、桐火桶石竹これなり。かかる方便（手がかり）※が在るなれば、皆諸共に賤の砦に赴いて災いを避けんと欲す。この儀はいかが」と囁き示せば紺太郎、新玉は喜んで、

「我々も小蝶、大箱、その手の勇婦の事までも伝え聞きつつ予てより慕わしく思いしに、今この便宜を得つる事は思うにましたる幸いなり。手引きを頼み参らする」と答えをしつつ盃をすすめて密談に及びけり。

しばらくして新玉は思案をしつつ夫に向かって、
「牢屋を襲って彼の姉妹を奪い取る時に城中の雑兵らに取り囲まれて難儀に及ぶ事もあるべし。かかれば御身の姉御前の麻姑手早蕨の刀自にも語らって、今この仲間に入れずもあれば討っ手を防ぐに不便なるべし。彼の女中は領主に仕えて女武者の頭にはべれば、その手下に腹心の兵の無からずやは。この儀をいかに思いたまう」と問えば紺太郎は頷いて、
「そなたの了見最も良し。しからば斯様斯様に計らって、▼早蕨殿をここへ呼び寄せ、密義を告げて従わずば、その折には斯様斯様」と言葉せわしく説き示せば新玉はその心を得て、一挺の乗り物を釣らせて早蕨の宿所に赴いてさて早蕨に告げる様、
「私の夫の紺太郎は俄かに病み患って、命危うく見えはべり。これらの由を告げんとて私は迎えに参ったり。いかで末期の対面して、その云う由をも聞かせたまえ」と真しやかにこしらえれば、早蕨はひどく驚いて、更に又、一議に及ばず、その駕籠にうち乗って摩利支天の宿所に来にけり。
その時主人の紺太郎が忙わしく出迎えるのを早蕨は見つつ又、驚いて、
「御身は俄かに病気あって、いと危うしと聞こえしに、さもあらざるはいかにぞや」と問えば紺太郎は微笑んで、
「それがしが病み患うはこの身一つの故ならず。人の命を救わんと思う病に候なり。まず此方へ」と先に立ち、奥座敷へ案内をしつつ古雛、雛形らに引き合わして、さて幸目、狩倉が毛太夫親子に陥入れられ、牢屋に繋がれし事の趣、みか手綿九郎が非法の計らいを告げ知らせ、所詮牢屋を襲い破り、幸目、狩倉を救い出し、賤の砦に赴いて三世姫に仕えんと云う談合が既に決着したり。さる時は御身もこれ、我が姉にて御座すれば、領主の咎めを逃れる道無く、災いその身に及ぶべし。願うは我々に一味して共に牢屋を襲い討ち、江鎮泊へ赴きたまえ。当国の越後之介時秋主は北条義時の親族たる権を弄び、民を虐げ、行い道に違うにて、留守を預かる綿九郎まで主を見真似に非法多かり。今この事の便宜に任して、濁りを去って清に就かば返って幸いならずや」と云うを早蕨は聞きながら、
「江鎮泊の勇婦らは三世姫を守りたて京鎌倉に弓を引く謀反人らである者を我いかにして従うべき。思いも掛けぬ事にこそ」と云わせも果てず紺太郎は懐刀を抜き出して、早詰め寄せたる眼を怒らし、
「既に密義を明かせしに、得心無ければ身の仇なり。端推り屈む姉なりとてもいかにして許すべき。覚悟あれ」と息巻けば新玉も又、詰め寄せて、
「女は夫に従う者なり。異議に及ばばその座は去らせじ。思案を仕替え▼たまわずや」と云うに古雛、雛形も共に懐剣を取り出して、「すはと云えば助太刀せん」と云わぬばかりに睨まえたり。

その時早蕨は「やよ待ちたまえ、人々」と押し止め左右を見返り、
「主人夫婦の云われる由は、元これ義勇の致すところ。それを否むにあらねども、なお又、別に思案もあらん。必ず逸りたまうな」と云うを夫婦は聞きながら、
「この事は我々夫婦の心一つに為すにもあらず。身内人の照鷺の謀り事に従って、談合決着したり

しものを今更思案に及ばんや」と云うに早蕨は嘆息して、
「しからんには是非も無し。私もちとの禄を捨てて一味合体すべきのみ。この身は年頃領主に仕えて女武者頭たるにより、手下の雑兵百人あり。しかれども善悪共にその身を投げ捨て、私に従わんと欲する者は二十人に過ぎざるべし。密かに彼らに語らって、共に牢屋を襲わんず」と云うに喜ぶ主人夫婦とひとしく勇む古雛、雛形、
「我々とても又、しかなり。此の年頃に目をかけたる手下の狩り人多しと云えども、物の用に立つべきは二十人ばかりなり。今より小千谷に立ち帰り家材雑具を取り片付けて、明後日の頃には必ず来つべし。麻姑手の刀自も今宵より密かに家材取り片付けて、約束の日を待ちたまえ。かくて本意を遂げて後に賤の砦に走らんには家材雑具を車に乗せ、或るいは又、小荷駄に負わして、その道にいだし置くべし。主人夫婦も抜かりはあらじ。これらの用意が肝要ならん」と云うに頷く紺太郎、新玉。その日を定め示し合わせて、忙わしく肴を引きかえ盃を改めて、又、早蕨をもてなしけり。

既にして古雛、雛形は今宵終夜道を走って小千谷に帰って用意を調え、明後日は再び来つべしとて忙わしく出て行きしかば、早蕨も又、別れを告げて、やがて宿所へ帰りけり。その明けの朝に新玉は照鷺許へ赴いて、牢屋を襲う密義の元末、小千谷の古雛、雛形と早蕨の刀自をも語らいすまして既に時日を定めたり。
その謀り事は斯様斯様と告げれば照鷺は喜んで、
「しからば私も当所を立ち退く心構えをしはべらん。御身は早く帰らせたまえ」と云うに新玉は暇乞いして宿所に帰って夫と共に旅路の用意をしたりける。

〇かくて約束の日に至って、古雛、雛形叔母姪二人は狩り人二十人を伴って紺太郎の宿所に来にけり。とかくする程に早蕨も家材を密かに持ちいださして、道にてこれを車に積ませ、その身は二十余人の手の者を従えて、又、この宿所に集いしかば、紺太郎、新玉も家材をいだし、路用を腰に付け、用意等しく調いけり。その時新玉は牢屋へ飯を送る賊女に扮装し、頭に風呂敷包みを戴いて、一人牢屋に近づく程に、早蕨、古雛、雛形、紺太郎らはその手の者を従えて静かに後より進みけり。
かくて新玉が牢屋の辺に到りし折に陣代みか手綿九郎は数多の雑兵を引き連れて見巡りの為にいでたるが、新玉を見て声を苛立て、
「そやつは誰の▼許しを受けて、一人ここまで来るぞや」と云う声聞いて照鷺は忙わしく立ち出て、綿九郎にうち向かい、
「この女は幸目、狩倉の親族ではべるなれば、彼女らに飯を贈らんとて来る者にてはべるかし」と云うを綿九郎は聞きながら、
「そは幸目らが親類なりとも、許して牢屋に入れる事かは。照鷺そなたが受け取って、幸目、狩倉に与えよ」と云うに照鷺は否むに由無く、新玉がもたらしたる風呂敷包みを受け取って牢屋の内に進み入り、さて幸目、狩倉に紺太郎夫婦の謀り事、古雛、雛形の叔母姪と早蕨をも語らって牢屋を襲う事の趣をしかじかと囁き告げて、
「早手を下すに程も無し。その折に牢屋をいでたまえ」と示して首枷を外せしかば、幸目、狩倉は恩義を感じて喜び大方ならざりけり。
かかる所に一人の獄卒が忙わしく走り来て綿九郎にうち向かい、

「早蕨殿が何事やらん、数多の手の者を引き連れて、獄の辺に用事ありとて押して入らんとしたまえり。いかが計らい申さんや」と告げれば綿九郎は眼を見張って、
「その早蕨は女武者の頭なれば、此の所へ用ありとても来るべき筈無し。いで我行って追い返さん。者ども続け」と云いかけて走り行かんとする程に新玉は早く立ち向かい、隠し持ちたる懐剣を抜きひらめかして討ってかかれば綿九郎らは驚いて、
「さては曲者、逃すな」と激しき下知に従う雑兵。早ひしひしと取り込めて、絡め捕らんとひしめいたり。さればこの時照鷺は牢屋口を押し開き、「時こそ良けれ、姉妹」と云うに幸目は一早く牢屋の内より踊り出て、首枷をもて綿九郎の頭をはたと打ち砕く。勇婦の手の内過たず、綿九郎は「あっ」とばかりに叫ぶをこの世の別れにて、脳味噌いでて死んでけり。
　その時狩倉、照鷺も続いて共に走り出て、▼狼狽え騒ぐ雑兵が持ったる棒を奪い取り、当たるに任して打ち散らせども、なおも取り巻く数多の獄卒、城中よりも百人余りの士卒が等しく助け来て漏らすまじとぞ攻め立てる。かかる折から早蕨は古雛、雛形、紺太郎らと共に四十人余りなる手の者、狩り人を従えて、さえぎり留める獄卒をうち倒し踏みにじり、「どっ」とおめいて走り来て、群立ちひしめく城中の士卒を薙伏せ、斬りなびけたる。
　いとも激しき戦いに幸目、狩倉、照鷺らも、いよいよ武芸を表して面も振らず斬り倒す。いずれも劣らぬ大刀風に辟易したる城兵らは一人も残らず逃げ失せて、手に合う者は無くなりたる。いざこの隙にと紺太郎、新玉、早蕨、古雛、雛形、幸目、狩倉諸共に手の兵を引きまとめ、早城門を走り出て近江路指してぞ立ち退きける。

傾城水滸伝　第十一編ノ二　曲亭馬琴著　歌川国安画

　かくて幸目、狩倉は早蕨、紺太郎、新玉、古雛、雛形、照鷺と味方の手の者、狩り人ら諸共に討っ手の士卒、獄卒を思いのままに斬り散らし等しく城門を走り出て、行く事半途余りにして、と見れば早蕨、紺太郎らの眷属、小者は家材を車に積み上して待ちつつそこに在りしかば、皆々木陰より出迎えてつつが無きをぞ祝しける。
　その時幸目、狩倉は早蕨、紺太郎らにうち向かい、
「我々は図らず諸々の勇婦たちの助けを得て、生きる事を得たれども、毛太夫親子に恨みを返さずに此のまま他郷へ走らんは返す返すも遺恨の事なれ。ここより彼処は程遠からず、彼奴の宿所へ押し寄せて家内の奴ども一人も余さず、皆殺しにして再び走らん。各々方は家材を守って、さぁさぁ先へ行きたまえ」と云うに紺太郎、新玉はしかるべしと答えつつ、早蕨らにしかじかとその由を告げ知らすれば、早蕨はそれ聞いて頷きつつ、▼
「しからば私も二十余人の手の者を従えて、共に彼処へ赴くべし」と云うを古雛は押し止めて、
「各々方には眷属あり。車に付いて一足も早く先へ走りたまえ。我々叔母姪は二十人の狩り人を従えて、幸目姉妹を助くべし」と云うをさすがに否みかねたる事急なれば口誼に及ばず、遂にその儀に任せけり。
　さる程に幸目、狩倉は古雛、雛形と諸共に狩り人らを従えて、庄官脛坂毛太夫の宿所にどっと

押し寄せ、家内の男女を切り倒す勢い竹を割る如く、なお奥深く込み入る程に毛太夫、毛源太は驚き怒って、共に刃をうち振りうち振り防ぎ戦わんとしたりしを幸目、狩倉きっと見て、願う仇とちっとも疑義せず、ひとしく進んで渡り合い丁々はたと斬り結ぶ、激しき勇婦の切っ先に叶うべくもあらざれば、脛坂親子は引き外して逃げんとするを逃がしもやらず、幸目は毛太夫を斬り倒し、狩倉は毛源太をばらりずんと斬り伏せて共に留めを刺してけり。

残る家内の者どもは古雛、雛形の手に討ち取られて逃れる者は無かりけり。かくて四人の勇婦らは狩り人らを引き連れて走りいでつつ道を急いで行く事一里ばかりにして、早蕨、照鷺、紺太郎、新玉らに追い付きつつ毛太夫親子を始めとして一家の眷属一人も余さず皆殺しにせし体たらくを言葉せわしく説き示せば、皆々聞きつつ喜んで心地良しとぞ讃えける。

〇されば七人の勇婦、紺太郎らは四十余人の手の者に眷属をうち守らせ、或るいは家材を宰領させて、夜に宿り日に歩み、行き行って近江の湖水の辺まで来にけり。これより先に桐火桶石竹は小蝶、大箱の指図に従い、世の風聞を探らん為に朱西の役の如くに、この湖の片辺に酒店を開いて在りしかば、古雛、雛形の叔母姪は▼図らず石竹に対面して喜ぶ事大方ならず、この余の者を引き合わせてうち連れ立って故郷を立ち退きたる事の趣、三世姫に仕えんとてこの地へ来る事までも一部始終を告げ知らせ、予て相知る山桃と飛子の安否を尋ねけり。

その時石竹は山桃、飛子が敵の為に生け捕られたる事の由を斯様斯様と説き示し、

「大箱の刀自は去ぬる頃より祝部の大刀自らを征伐の為に戦を起こして彼処に滞陣したまえり。その故は斯様斯様」と祝部親子が此の年頃に江鎮泊を攻め討たんとて、仇敵の思いを為すにより捨て置き難くて戦いに及びし由を物語り、

「その戦、利あらずして、味方の勇婦五六人が虜になりし者もある由が江鎮泊に聞こえしかば、小蝶の刀自は驚いて、軍師呉竹殿に二網、五井、七曲、薄衣、筒鳥の五勇婦を差し添えて、五百の人馬を領せしめ、味方の陣所へ遣わしたまえば、早程も無く此の所まで来たまわん事は疑い無し。まずしばらくはここに憩いて軍師に対面したまえかし」と云うに古雛らは一議に及ばず、皆々等しくその意に任してそのまま呉竹を待つ程に、果たして呉竹は二網らの五勇婦と諸共に人馬を率いて来にければ、石竹はこれを奥座敷に迎え入れ、さて、古雛、雛形らが早蕨、照鷺、幸目、狩倉、紺太郎、新玉と共に全て八人で三世姫に仕えんとて四十余人の手の者を従えて、越路より来る事の趣を斯様斯様と告げしかば、呉竹の喜び大方ならず、やがてその人々に対面して三世姫に随従の喜びを述べて、さて云う様、

「此の度大箱の刀自が総大将として祝部の城を攻められしに、味方が折々利を失って勝負まちまちなるにより、小蝶の刀自の指図に従い、私も彼処へ出陣の為に今日此の所を過ぎるなり。折から各々方と対面しつるは是味方の幸いあり。彼の祝部の大刀自の三人の娘の武芸の師に金撮棒肬玉と云う勇婦あり。その隣郷の野作の刀自女も戦を起こし、相助けて奇角の勢いをなすにより、侮り難き大敵なり。各々思う由もあれば心隈無く示したまえ」と云うに早蕨が進み出て、

「その金撮棒肬玉は私と武芸の同門にて同じ師匠に従いたる古き好のはべるかし。この儀によって我々は偽って彼処に赴き、内よりこれを謀れば味方の大利にはべらずや」と云うに呉竹喜んで、

「そは幸いの事なりかし。しからばまず各々は私と共に祝部の陣に赴いて、春雨の刀自に従いたまえ。▼さて大功を立てて後、江鎮泊に伴うべし」と云うに早蕨らも喜んで、皆々その儀に任せけ

り。かくて呉竹は二網姉妹、薄衣、筒鳥らと共に早蕨、紺太郎らの八人を伴って大箱の陣所に到着せしに、大箱はこの頃の敗軍に気を屈して物思わしき気色なれば、呉竹はまず 盃 を請いいださせて大箱にこれをすすめ、さて幸目、狩倉の事の始めより彼の八人の 輩 が三世姫に仕えんとて古雛、雛形が相知れる石竹、飛子、山桃らを心当てに味方に参りし事の 趣 、並びに麻姑手の早蕨は肬玉と同門の 好 あり、よって内応外合の謀り事を行って、彼女を 祝 の城へ遣わし、斯様斯様の手立てをもて敵を滅ぼさんと思う由をつまびらかに説き示す長物語りに及びけり。

大箱これを聞きながら、喜ぶ事限りも無く、やがて早蕨、照鷺、古雛、雛形、紺太郎夫婦、幸目、狩倉らに対面して喜びを述べ、長途の疲れをねぎらって桜戸、花的らの諸勇婦に引き合わして、酒宴を設けてもてなしけり。

その時呉竹は早蕨にうち向かい、

「各々は此の所より斯様斯様に身拵えして、手勢を引き連れ祝部の城に 赴 き、斯様斯様に云いこしらえて彼の城に入りたまえ。さて三日ばかりを経て、此方より押し寄すべし。その折には斯様斯様、第五日には斯様斯様、又、その次は斯様斯様」と謀り事を説き示せば、早蕨らはその意を得て、かたの如く用意をしつつ別れて敵の城へ行きけり。

かくて又、呉竹はこの席に連なりたる女 韋駄天夏女に向かって、

「御身は賤の 砦 に帰って、大和文字植梨、 聖 小刀彫妙、女貞木袖垣、 傭 針妙抜糸を伴って来たまえかし。 私 は此の四人の勇婦を必ず用いる所あり。さぁさぁ」と急がし立てれば、夏女は異議無くその意を受けて、江鎮泊へぞ帰りける。かかる所に胡沙村の領主野作の刀自女の娘の 健 少子鳴子は手の者を僅かに従えて大箱の陣に来て、申すべき事ありととなえて対面を請い求めしかば、大箱はこの由を聞きながら呉竹、二網、五井、七曲らを従えて、いでて鳴子に対面す。その時鳴子は慇懃に大箱にうち向かい、

「 私 の弟胡沙丸は祝部の三番娘熊姫と許 婚せし 縁 にひかれて怨敵となりしより、遂に 虜 にせられたり。しかりと云えども我々親子は江鎮泊の勇婦たちと元より恨みがあるにあらず、血気に逸りし胡沙丸が毛を吹いて傷を求めたる後悔は臍を噛むに到れり。願うは弟を返させたまえ。しからんには此の後々まで祝部を相助けて御陣に敵対しはべらじ。この儀を許させたまえかし」と云うを大箱聞きながら、

「云われる 趣 は余義無けれども、味方の大将腐鶏を胡沙丸に生け捕られて、その返報を返さん為に桜戸の武勇によって胡沙丸を生け捕りつつ賤の 砦 へ遣わしたり。かかれば 虜 にせられたる腐鶏を返したまえ。さる時は望みの如くに胡沙丸を返すべし」と云うを鳴子は聞きながら、

「腐鶏殿をば去ぬる頃、祝部へ送り遣わしたりければ 私 が自由に致し難し。この儀を察したまえかし」と云えば大箱 頭 を振って、

「しからんには胡沙丸を返すべき云われは無し。ともかくもして腐鶏を返さぬ程は望み叶わず。そこらの手立てが肝要ならん」と云われて、鳴子は理の当然に再び返す言葉も無く、困じ果てたるばかりなり。

その時呉竹は進み出て鳴子に向かって、

「和女郎、舎弟がいと惜しくば、よしや腐鶏を返し得ずとも今よりは祝部と仲違いして、決して彼女を助くべからず。およそこれらの計らいをよく見届けて後にこそ、胡沙丸を返すべけれ。なおざりにな▼したまいそ」と云うに鳴子は喜んで、

「そは心得えはべりたり。此の後には祝部の雑兵なりとも我が領分に来る事あれば、絡め捕って参らせん。返す返すも弟の事をひたすら頼み奉る」と言葉を残し暇乞いして、本意無く胡沙村へぞ帰りける。

〇さる程に早蕨らは手の者を引き連れて祝部の城に赴き、心利きたる手の者を一人先へ走らせて肬玉にかくと告げしかば、肬玉は聞きつついぶかって物見の窓よりうかがい見るに、まがうべくもあらぬ早蕨が一手四五十人の男女を引き連れて城門近くたたずみたる。その事の体たらくは疑わしき事も無ければ、やがて城中に招き入れて対面して問いけるは

「麻姑手の刀自は此の年頃、時秋主に従いたまいて越後に在りと聞きたるに、今又、何らの故あって、この地に来たまう事やらん」と云われて早蕨はおめたる色無く、

「私は御身に知られし如くにさせる武芸にあらねども、幸いにして東へ聞こえて女武者頭になされんとて此の度鎌倉殿より召されたり。よって随身の教え子をさえ引き連れて、彼の地に赴きはべるなる。道の便りが悪しからねば、いかでか御身に対面してこれらの由を告げ知らせ、力を合わして江鎮泊の賊婦らを生け捕って東へ土産にせばやとて、さてこそ推参したるなれ」と真しやかに云いこしらえて照鷺、新玉、幸目姉妹、古雛、雛形を見返って、彼女らは武芸の弟子なりとて引き会わせ、又、摩利支天紺太郎をば鎌倉殿より遣わされたる御使いなりと偽って引き会わせなどするに、肬玉はあざむかれて、ちっとも疑う心無く、「そは幸いの事なり」とて喜ぶ事大方ならず、忙わしく奥に至って大刀自、龍子姉妹に早蕨が来る由を斯様斯様と告げ知らせ、

「彼女は私の妹弟子にて、一つ師匠に従いし古き好のはべるなり。さるを此の度鎌倉へ召されて赴く途中なれどもしばらくここに逗留して、力を合わして大箱らを生け捕って鎌倉へ引きもて行かんと云いはべり、その随身の教え子らは劣らぬ勇婦と見えはべり。いかで対面したまえかし」と云うに大刀自喜んで、

「そは屈強の助けを得たり。御身と同じ師に従いし、弟子朋輩であらんには武芸もさこそと推し量られる。さらば対面すべけれ」とて龍子、虎子、熊姫ら三人の娘が諸共に衣装を改め書院に出て、早蕨、照鷺、幸目、狩倉、古雛、雛形、紺太郎、新玉らに対面して酒宴を設けてもてなしけり。

　その時早蕨は大刀自親子にうち向かい、江鎮泊の小蝶、大箱らは数多の賊婦諸共に三世姫を守り立てて京鎌倉に弓を引く烏滸の曲者の由は越路へもをさをさ聞こえて、その大略は知りはべり。されば又、大箱らは▼貪れども飽く事無く、此の所まで手を伸ばして押し寄せ来るは運の尽き、自ら滅亡を取る者なり。私は不肖にはべれども、肬玉殿と力を合わせて必ず彼奴を生け捕るべし。戦の勝負はいかにぞや」と問えば大刀自は膝を進めて、

「然ればとよ、その事なれ。しばしば勝ちに乗ると云えども、賊徒は元より大軍なれば未だ全き☆勝ちを得ず。しかるに今図らずも金撮棒に縁ある御身を始め勇婦たちがしかも手勢を引き連れて味方に加わりたまう事はいと頼もしく思いはべり。麻姑手の刀自は鎌倉へ召されて女武者頭になりたまわれれば我々は下風に立つべき者ぞかし。萬に指図を願うのみ」と云うを早蕨聞きながら、

「いかでかはさる事あらん。御身はこれ一郡の領主にして、元より武勇の聞こえあり。我々こそ下風に立って、その軍配に従うべけれ。由も無き事を宣うな」と云うに大刀自微笑んで、いよいよ他事無くもてなしけり。

　かくて両三日は敵も寄せ来ず、城中しばらく無事なりけるに、第四日の未の頃に敵又、押し寄せ

来ると云う物見の知らせに城中にも既にその備えあり。敵に足を試させじとて、城主祝部の大刀自の第二の娘なりける虎子はその勢五百余騎を前後左右に従えて、城戸押し開いて討って出て、近づく敵に馳せ向かえば、大箱の陣中より新手の大将、薄衣、筒鳥は三百余騎を従えて開き合わせ押し包んで面も振らず攻め立てれども、虎子は騒ぐ気色も無く薄衣、筒鳥を左右に受けて、またたく隙に討ち散らし、大箱の本陣を切り崩さんとて進む程に、花的は遙かにこれを見て、馬に角入れかけ隔て人混ぜもせず戦う事は五十合余りに及びし時、花的はわざと偽り負けて馬を飛ばして逃げ走るを虎子は尚も逃さじとて、すかさず追わんとする程に一人の雑兵が声を掛け、

「やよ姫上、止まりたまえ。彼女は女弓取花的と呼ばれたる名だたる弓の高手なり。追わせたまえば過ちあらん」と心付けつつ止めれば、虎子は「実にも」と頷いて馬を控えて遂に得追わず、早く手勢を引きまとめて城中に帰り入りしかば、大箱も又、囲みを解いて元の陣所に退きけり。

　かくて山颪虎子は手の軍兵を引き上げて城中に帰り来にければ、早蕨はこれをねぎらって戦いの勝負を問うに虎子は答えて、

「私が討って出たる時、始めは大箱の先手の賊婦に伊達模様薄衣、縄代水筒鳥とか呼ばれる両人が数多の手勢を従えて、鬨を作って競いかかるを私ちっともためらわず、多勢の中へ割って入り、四角八面に打ち散らし大箱の本陣を目掛けてしきりに進む程に、賊の大将花的が真一文字に遮り留めてはや鉾先を交えしかば、私は彼女と戦う事、五十余太刀に及ぶ程に、花的は遂に打ち負けて馬を跳ばして逃げ走るを私追わんと思いしかども、彼女は弓の名人にて女弓取と呼ばれたる屈強の手練れなれば、偽り負けて引き退いて追われる所を射て落とさんと計る事もやと思いしかば、そのままにして追い捨てたり。かかりし程に既に早、日陰も西に傾きたれば、心ならずも兵をまとめて帰り来るなり」と告げれば早蕨頷いて、

「江鎮泊の賊婦どもはその名号のみ物々しければ、知らざる者は聞き怖すれども、計るにいかばかりの事かはべるべき。明日の戦いには私が一番に討って出て、薄衣、花的は云えば更なり、賊の総大将大箱を生け捕るべし」とぞ誇りける。

〇かくてその次の日に敵が又、一千五百余騎にて押し寄せ来ると聞こえしかば、城の大将祝部の大刀自の夜叉御前は櫓に上ってこれを見るに、御前の右に金撮棒肬玉あり、左に麻姑手の早蕨あり。その時江鎮泊の新手の大将の大歳麻二網、気違水五井、鬼子母神▼七曲姉妹の三人が五百の兵を従えて城門近く押し寄せ来て、思いのままに罵り辱しめて敵を誘いたりければ、早蕨は勃然とひどく怒って、「いで蹴散らしてくれんず」と云うより早く身を起こし、櫓を下りんとしてけるを大刀自の一番娘の雲の峯の龍子が方辺に在り、その身の武芸をこの時に表さんと思いしかば急に早蕨を押し止めて、

「やよ、しばし待ちたまえ。計るにあればかりなる賊の雑兵は何程の事かあらん。私が只今討って出て皆殺しにて見せはべらん。いでいで」と云い掛けて、忙わしく櫓より下って四五百人の手勢を引き連れ、萌黄縅の腹巻きに小鎖の小手脛当て、黄金造りの大刀をはき、連銭芦毛の太くたくましき馬に雲渦鞍置かせて厚総掛けたるにゆらりとうち乗り、九尺ばかりなる手鉾を脇挟み、四五百人の兵を従えて大手の城戸を開かせて、どっとおめいて突いて出て縦横無碍に薙ぎ立てれば、驚き騒ぐ寄せ手の雑兵は只蜘蛛の子を散らすが如く右往左往に奔走す。

　その中に二網、五井、七曲は逃げる味方を乗り励まして、「汚し返せ」と呼び張れども崩れ立った

る癖なれば耳にも更に聞き入れず、逃げる味方に誘われて、先手の大将二網ら三人の姉妹も一町余り退いてしばらく息を付く間もあらねず。龍子はいよいよ勝に乗り、又、只潮の湧くが如くに逃すまじと追う程に、待ち設けたる二陣の大将虎尾の桜戸は退く先手に立ち替わり、道を横切り馬は馳せ寄せて龍子をきっとにらまえて、

「此は推参なり。しばらく待て、虎の尾の桜戸はここに在り」と名乗り掛けて鉾を回して手痛く龍子と戦う事は半時ばかりに及べども勝負を分かたざるに、早夕暮れになりしかば敵も味方も引き太鼓を鳴らして相引きにぞ退きける。

かくて又、その次の日も寄せ手押し寄せ来にければ、早蕨は遙かにこれを見て、

「今日こそ私が討って出て、一手柄して見せまつらん。者ども続け」と馬にうち乗り、早城門より乗り出せば、従う手の者四十余人に加勢の城兵三百余騎が魚鱗鶴翼（戦の陣形）に備えを立てて、静々と進み出て、既に近付く寄せ手の大将命不知岩飛葉の▼四百余騎の真ん中へどっとおめいて突いてかかれば、岩飛葉も又、先に進んで早蕨に渡り合い、人混ぜもせず只両人が馬を互いに乗り違わして切っ先より火いづるまでおめき叫んで戦う程に、いかにかしけん岩飛葉は大刀をからりと打ち落とされてひるむを得たりと早蕨は鎧の揚巻き引き寄せて、馬上ながらに生け捕りけり。

岩飛葉は既に虜にせられて、その手の一陣乱れしかば寄せ手はこれに驚き騒いで、総敗軍になりけるを早蕨は思いのままにうち散らし、追い捨てて、岩飛葉を引き立てさせて静かに城にぞ入りにける。さても岩飛葉の武芸勇力が早蕨に劣りしにあらねども、これも又、呉竹の謀り事にて、早蕨をあくまで敵に信用させんとて予てその意を示せしかば、岩飛葉はこの戦いにわざと早蕨にうち負けて生け捕られたりけるなり。

さる程に早蕨は城中に退いて、この日の戦いの体たらくを大刀自に告げ知らせ、岩飛葉を引き据えさせて実見に入れしかば、大刀自は斜めならず喜んで、

「始めに手長蛯早潮と云う賊婦一人を絡め捕り、その後又、大箱の忍びの者と聞こえたる山桃をも絡め捕り、かくて合戦始まって、黄葉、秦名、腐鶏、飛子らを生け捕りたるに、今又、御身の武勇によって、この岩飛葉を虜にしたり。かかれば大箱らを討ち滅ぼして、江鎮泊に塵も残さずかき払わん事遠かるまじ。真にお手柄、お手柄」とひたすら誉めて止まざりけるを早蕨も又、共に祝して、

「これしかしながら大刀自御前の武徳によるものにして私の幸いになれるものから、これらは手柄とするに足らず。私必ず大箱を生け捕って、皆諸共に鎌倉に引きもて行って御身の武功を聞こえ上げ、恩賞を請い奉らん。かかれば七人の生け捕りをば皆張輿※にうち乗せて、雑兵に守らせたまえ。大箱を生け捕りし日に私は早く発足すべき。手回しの為にはべるかし」と云うに大刀自その儀に任してかたの如くに計らいけり。

※張り輿（はりごし）： 屋形と左右の両側を畳表で張り、押縁(おしぶち)を打った略式の輿。

是よりして大刀自親子は深く早蕨らを尊敬していささかも疑わず、まさにこれは祝部の滅亡すべき時節にやありけん。内外の駆け引きを皆早蕨に打ち任して、二心無き者と思えり。かかりし程に照鷺、紺太郎、新玉らは出口抜け道に心を付けて、城の案内一つも漏らさず早事如く知りたりければ、密かに寄せ手を待ちたりけり。

かくて中二日ばかり過ぎて後、大箱が諸手を尽くして大軍にて押し寄せ来る由を物見の雑兵の知らせにより、大刀自は三人の娘並びに肬玉、早蕨らと諸共に櫓に上ってこれを見るに、此の度は事に大軍にて城の四方を取り巻いて攻め破らんとする勢いなるを肬玉しばらく望み見て、

「今日の戦はこの日頃の小競り合いに同じからず。此方よりも四手に分かれて四方の門より討って出て、思いのままに斬り崩し大箱を生け捕るべし。皆、いでたまえ」と急がし立てて、その身は三百五十余人を従えて搦手（裏門）より討って出れば、龍子、虎子、熊姫らも各々三百五十人の兵を前後に備え、或るいは大手、西の木戸、東の門と立ち分かれ、早静々と繰り出して近づく敵を待つ程に、早蕨はその身の手勢十四五人を▼従えて、弱からん方を助けんとて大手の橋の中程に控えて軽々しく未だ動かず。かかりし程に古雛と雛形は生け捕りの賊婦らを入れ置きたる張輿を守るととなえてそこらを奔走してければ、予て相知る山桃、飛子はこの叔母姪を早く見て、密かに心に喜びけり。

とかくする程に城外には戦い既に始まりぬとて、人皆心を空にしたる隙をうかがう古雛らは謀り事の趣を山桃、飛子ら七人の囚われに囁き示して、その心をぞ得させける。

既に四方の門外に鬨の声がひどく起こって敵も味方も入り乱れ、戦い酣なりし頃、時こそ良けれと古雛は雛形に目を配して、彼の斧をもて張輿をうち守り居る雑兵の頭を微塵に打ち砕き、或るいは肩先、背、尻を当たるに任して斬り伏せ斬り伏せ、彼の七人の張輿を一つも残さず打ち破れば、「得たりや、おう」と勇婦の面々、秦名、黄葉、山桃、腐鶏、岩飛葉、飛子、早潮に到るまで蝗の如く踊り出て、辺りに落ち散る雑兵の太刀、打ち物を拾い取り、只稲妻の走るが如くに四角八面に斬って回われば、その切っ先に向かう者は討たれずと云う事無し。

これのみならず照鷺も又、此の所へ走り来て、古雛、雛形▼諸共に辺りへ近づく雑兵をなぎ倒し斬り伏せて共に奥へぞ進みける。

〇さる程に幸目、狩倉姉妹は味方の手の者を従えて、出口出口を斬り塞ぎ逃れいでんとする者を一人も漏らさず打ち止めたる。その隙に紺太郎、新玉は早あちこちに火を掛けて、寄せ手の旗印を上げたりければ、城外に討ち出たる祝部方の諸軍勢はこの有様を見返って驚き騒ぐ事大方ならず、

「さては返り忠（裏切り）の者あって、今早城に火を掛けたるぞや。此はいかにせん」とばかりに戦わんとする擬勢も失せて、皆逃げ道をぞ求めける。されば又、岩飛葉は気早き勇婦なりければ、斬り倒したる雑兵の物の具をはぎ取ってひしひしと身を固め、分捕りしたる大太刀を抜きそばめ、先に進んで奥の座敷に込み入る程に、城の大将祝部の大刀自は思い掛け無き城中の騒動に驚き慌てて、

「此は何事ぞ」と刀を引き下げ、いでて制せんとしたりける。出会い頭に岩飛葉は向かうにしっくと立ち塞がり、「大刀自、そこを動くな」と声を掛けつつ打ちひらめかす、刃の光に大刀自はいよいよ慌てふためいて、更に問答の暇無く止む事を得ず抜き合わしてしばらく防ぎ戦うものから、勇みに勇む岩飛葉のさしも激しき切っ先をあしらいかねて既に早、数ヶ所の痛手に弱り果て、遂に頭を取られけり。

この日盛んなる兵は龍子、虎子、熊姫、肬玉らに従って、皆城外に打って出て、残るは僅かに三百余人。只これ老兵と童にてその余は女どもなりければ、皆ここ彼処に切り倒されて逃れる者がある事無く、たちまち城は落ちてけり。

〇さる程に雲の峯龍子の一ト手は城の火の手を見て、ひどく驚き速やかに退いて、防ぎ止めんと思う甲斐無く付き従いし軍兵は無惨や大方落ち失せて只五六騎になりしかど、さて止むべきにあらざれば龍子は馬に鞭を当てやや城門に近づく程に既に大手を切り塞ぎたる早蕨が声を振り立て、

「龍子知らずや、我々は予て軍師呉竹の謀り事に従って味方と見せて城に入り、早十二分に謀りすまして、大刀自を始めとして城中の者どもは一人も漏らさず討ち取ったり。逃れぬ所と覚悟して、刃を受けよ」と罵って、持ったる薙刀取り直し馬の足を薙んとすれば、早蕨の手の者共は龍子の従者を斬り伏せて隙間も無く斬ってかかれば、龍子は▼いよいよ驚き慌てて引き返して逃げんとしたる後辺よりもどっとおめいて追っかけ来たる薄衣、筒鳥。早ひしひしと取り込めて、息をもくれず揉んだりければ龍子は弓折れ勢い尽いて、遂に薄衣、筒鳥らの二人の勇婦に討たれけり。

　されば虎子も龍子に等しく三百五十人の手の者は或るいは討たれ、或るいは落ち失せ、その身一騎になりしかど、尚も城に入らんとて搦手(裏門)の橋際まで辛うじて近づく程に、待ち設けたる幸目、狩倉が思いのままに乗り辱しめ、手鉾をひねって突いてかかれば、虎子はいよいよ辟易して、退き逃げんとする程に、早追い来る旋風力寿に馬の足を薙れて、主諸共に倒れしかば、力寿は再び斧振り上げて起きんとしたる虎子の首を水も溜まらず討ち落とせば、この手の兵は声を合わして早勝ち鬨を上げにけり。

　されば又、金撮棒肬玉も散々に討ちなされて、これも一騎になりしかど、追い来る寄せ手を辛うじて幾度と無く切り抜けて、行方も知らずなりにけり。肬玉の事この下に物語り無し。

　これより後の事共は下帙四冊につぶさなり、下帙も続いて程なく出板。今年も変わらず御評判、御評判。

傾城水滸伝　第十一編ノ三　曲亭馬琴著　歌川国安画

　さる程に月の輪の熊姫も思い掛け無き落城に再び戦う擬勢も無く、寄せ手の囲みを切り抜けて胡沙村の方へ走る時、手勢の過半は落ち失せたれどもなお百余人従えり。

　その時熊姫思う様、

「・・・・・祝部、胡沙、李野の三ヶの庄は領主が互いに相助けて苦楽を共にしたりしに、李野の岩居の野心にて江鎮泊に一味せしより事遂にここに及べり。それすら尽きせぬ恨みなるに、胡沙村の鳴子めまで何時しか寄せ手に心を寄せて、戦い難儀に及ぶまでおめおめとして加勢に出ず、あまつさえ胡沙丸は私と許婚せし好に背いて大箱の男妾になると云う風聞あり。かかればこれ親も子も義に背き好を忘れし、人非人と云うべきのみ。いでや行き掛の駄賃※なり。今胡沙村へ押し掛けて、野作一家の奴どもを皆殺しにして腹を癒ん。」

※行き掛けの駄賃：ある事のついでに他の事をすること。また、そうやって儲けること。

　さはとてやがて手の者どもに心を得さし馬を早めて、胡沙の宿所に押し寄せて、鬨をどっと作りつつ無二無三（がむしゃら）※に斬って入りしに、この日健少女鳴子は祝部の落城を伝え聞いて落人らを絡め捕り、寄せ手の陣へ引き持て行って、それを功に胡沙丸を請い求めんと思案をしつつ、手勢三

百余人を従えて祝部の方にいでしかば、留守にははかばかしき者は在らず、十人余りの老兵と女童のみなりければ、此はいかにせんとばかりに驚き騒ぎ逃げ迷って、ここ彼処に切り倒されて逃れる者は無かりけり。

※無二無三（むにむさん）：①二、三はなく、唯一のこと。②がむしゃら。ひたすら。

　その時主人の野作の刀自女は薙刀をもて込み入る敵をしばらく防ぎ戦うものから、その身の他に従う者無く、元より▼老女の事にしあれば次第次第に痛手を負って、遂に熊姫に討たれけり。かくて又、熊姫は鳴子をあまねく尋ねしかども絶えて行方の知れざりければ、さては落ち失せたらんとてそのまま家に火を掛けさせて、作り磨きしかきあげ城をまたたく隙に焼き滅ぼし、まず都まで落ちんとて手勢を従え忙わしく退き去らんとしたりける。出会い頭に寄せ手の軍兵、その勢およそ四五百人がまっしぐらに追いかけ来て、真っ先に進む一人の勇婦は是すなわち別人ならずその手の大将力寿なり。早ひしひしと取り巻いて漏らすまじと揉んだりければ、熊姫は遂に逃れる道無く、やがて力寿と刃を交えてしばらく挑み戦う程に、力寿が苛って打つ斧に哀れむべし熊姫は唐竹割りに斬り倒されて敢え無く首を取られけり。

　力寿はかくてもなお飽かずに逃げる熊姫の残兵を追いつめ追いつめうち殺し、しきりに猛り狂う折から鳴子は宿所を焼き討ちせられし煙りを仰ぎ見て、ひどく驚きそこより俄かに引き返し、跳ぶが如くに走り来るを力寿は悪く心得て、「これも又、熊姫の加勢の軍兵なるべし」と思えば一言の問答にだも及ばずに只勢いに任しつつ、どっとおめいて討ってかかれば鳴子はいよいよ驚き騒いで止む事を得ず、敵を支えてしばらく挑み戦えども運の傾く癖なれば、頼みきったる手の者は名残り無く討ち取られ、その余は早く落ち失せて、その身一騎になりけるを辛くして切り抜け切り抜けて都の方へ落ち失せけり。鳴子の事は後々まで、この他に物語り無し。

〇かかりし程に大箱は呉竹、桜戸、花的らの諸勇婦と諸共に大軍を従えて祝部の城に入りしかば、早蕨、照鷺、紺太郎夫婦、幸目、狩倉、古雛、雛形、この余秦名、黄葉、岩飛葉、飛子、山桃、腐鶏、早潮らが諸共にこれを迎えて、各々その功を唱えて勝ち戦を寿で、討ち取る所の首どもを実見にぞ入れにける。

　かかる所に旋風力寿は熊姫の首を携えて大箱の辺に来て、さて誇り顔に告げる様、

「私は落人らを討ち止めんとて▼一ト手の軍兵を従えて胡沙村に至りし折、折も良く月の輪の熊姫にいで会って、その手の奴どもは更なり、これ見そなわせ、熊姫をもかくの如くに討ち取ったり。しかるに胡沙の野作の娘の健少女鳴子とやらんが一ト手の兵を従えてまっしぐらに走り来にけり。その時私は思う様、

「鳴子の弟胡沙丸はこの熊姫と許婚の好ありと聞こえしかば、彼奴はこれ熊姫の加勢をせんとの為にこそ此方へ走り向かうならめ。やるな逃すな」と呼び張って縦横無碍に攻めつけ攻めつけ、鳴子の手の者幾百人かを大方斬り伏せはべりしかど、残り惜しきは鳴子めを討ち漏らしはべりにき」と云うを大箱聞きながら、たちまちに気色変わって力寿をにらまえ声高やかに、

「そなたは誰の許しを受けて胡沙の人々を討ちしぞや。彼の鳴子は去ぬる頃、祝部とは手切れして降参せんと云いつるをそなたも大方聞きつらん、よしやその事偽りなりとも、その虚実をもたださずに強いてさる振る舞いをする事は只これ粗忽にあらずや」とあくまで叱り懲らされても力寿はひ

るまずあざ笑い、
「御身はなどて胡沙らをさまでに贔屓したまうやらん。去ぬる頃、胡沙丸が祝部の加勢に出て、御身を討ちも取らんとせしを早くも忘れたまいしか。思うに御身は胡沙丸の男振りに心迷って、夫婦にならんと欲したまう下心があるにより、彼の鳴子をも小姑の思いをなしていと惜しみ、私を叱りたまうにこそ」と云うに大箱はいよいよ怒って、「いかでかはさることあらん。益無き口を叩きなせそ」と叱り止めて左右を見返り、
「さるにても彼の鳴子が味方の陣へは来たらずして、返って力寿と戦いしは心得難き事なりかし。訳を知りたる者もやある」と問われて、この日降参の雑兵一人が進み出て、
「鳴子は今日祝部の落ち人を討ちとめて、いかで御陣へ参らんとて軍兵数多従えて立ちいでたりしその後へ熊姫が押し寄せ来て、一家の男女を斬り倒し、あまつさえ野作の刀自女を熊姫手づから討ち取って、そのまま城へ火を掛けて焼き滅ぼしつついでて行く折、思わず旋風にいで会って熊姫主従は討たれたり。その折鳴子は我が城を焼き失われる煙りに驚き、道より取って返せしを力寿の刀自の粗忽にて討ち果たしたまいにき。なれども一人鳴子は逃れて▼行方も知らずなり候」と告げるに大箱は嘆息して、
「しからば果たして力寿の粗忽、その罪はいよいよ許し難かり。必ずしも軍法に行うべき者なれども、大敵たる祝部の大刀自の娘を二人まで討ち取ったる功あれば、此の度はまず許すなり。向後をきっと慎むべし。第一番の大功は大刀自を討ち取つたる命不知岩飛葉なり。次は薄衣、筒鳥なるべし。この余の人々の功名手柄も凱陣の後に姫上に聞こえ上げ奉って、恩賞の御沙汰あるべし。各々此の儀を心得たまえ」といと厳かに云い知らせれば皆々等しく答えける。
　されば力寿は臆たる色無く、
「ちとの粗忽を咎に負わして、類い稀なる大功を今更空しくせられても、私に勝れる者は無し。心地良し良し」と誇って笑い楽しみけり。
　かくて又、大箱は呉竹らにうち向かい、
「此の祝部の百姓どもは年頃我が砦をもて仇敵の思いを為した烏滸の曲者どもなれば、事のついでに一人も余さず絡め捕らして誅すべし」と云うを岩飛葉が押し止めて、
「御憤りはさる事ながら、始め道を教えたる彼のお世話婆がなかりせば、その終夜の敗軍に味方残らず討たるべし。願うは彼女を召し寄せて、ちとの褒美をたまえかし」と云うに大箱頷いて、
「実に、彼の者の事を忘れたり。さらば彼の婆を呼ぶべし」とて時を移さず召し寄せて、大箱が自ら対面して道を教えし志を誉めて五十両の金を取らせ、この一里の者どもは心良からぬ奴どもなれば皆誅せんと思いしかども、善心深きそなたに愛でて、そのまま許し置くものなり」と懇ろに説き示せばお世話はいよいよ喜んで、その金を受け戴きやがて宿所に帰りけり。
　その後又、大箱は祝部の城にある所の兵糧、軍用金を出させるに玄米弐十万石あり。これにより祝部、胡沙の百姓どもに一石づつ分け取らして、その余れる分と金銀を幾百両の車に積ませて江鎮泊に送り遣わし、さるにても金撮棒肬玉は智勇優れし者なるに、彼女は早く落ち失せて、味方と為すに由無きのみ。残り惜しき事なりとて、ひたすらこれを惜しみけり。
　されば胡沙、祝部の百姓どもは徳をもって恨みに報いし大箱の計らいを感じ思わぬ者も無く、喜びの声が里に満ちたり。
　その時大箱は祝部の城を焼き失って、物一つとして貪る事無く、諸勇婦と諸共に軍兵を従えて、

早凱陣にぞ赴きける。

〇ここに又、李野の領主の不向上鷲岩居は矢傷既に癒えたれども、祝部の大刀自親子と恨みを結びし上からなお籠もり居てその戦を助けず、かかりし程に祝部方は内応外合の謀り事に落とされて、たちまち滅び失せたる由を伝え聞きつつ、さもこそと世に心地良く思う折から図らずも都より女武者所の別当亀菊の雑掌と聞こえたる捻金、横折と云う女官両人が▼犬蓼、稀籾と呼ばれる二人の女武者と数多の雑兵を従えて岩居の宿所に来にければ、岩居は衣装を改めて出迎えつつ対面す。

その時横折、捻金らが云う様、

「此の度江鎮泊の賊婦どもが祝部の庄へ押し寄せて、大刀自親子を討ち滅ぼし又、胡沙村をも討ち掠めて鳴子らが没落したる由は既にその聞こえあり。これにより加勢の官軍をもて賊婦らを退治あるべしとて御沙汰を発しませしに、早落城に及びしかばその儀を延引せられたり。しかるにその身は隣郷にありながら約を守らず義に背いて祝部へ加勢に出ず、あまつさえ彼の賊婦らに一味して敵を引き入れたりける由は風聞既に隠れ無し。これをもて亀菊殿の下知に従い、我々両人向かうたり。謀反露見の上からは陳ずるとも許されんや。覚悟をすべし」といかめしく述べるを岩居は聞きながら、騒ぎたる気色無く、

「そは思い掛けも無き、私いかでか江鎮泊の勇婦らと一味して敵を引き入れはべるべき。祝部親子が義に違いて仲悪しくあるのみならず私に矢傷を負わせしかば、心ならずも籠もり居て傷養生を致せしのみ」と云うを両人は聞きながら、

「その言い訳は都へ参って使廳にて申すべし。御法なれば縄を掛けん、覚悟あれ」とたしなめれば雑兵らが走りかかって岩居を厳しく縛めけり。

その時横折、捻金は岩居の方へにはべりたる渡橋をきっと見て、

「この女めも主に等しく逆心あって、江鎮泊へ荷担せし由隠れ無し。さぁ、そ奴をも縛めよ」とて又、渡橋をも縛らせて主従共に引き立てさせ、その身その身は旅乗り物に乗りつつ諸人を従えて都路指して出て行きしを留めんとする者も無く、岩居の家の子（家臣）、眷属どもは恐れ迷いていで合わず、息を凝らして居たりける。

〇かくて横折、捻金は岩居、渡橋を引き立てさせて、行く事およそ半道ばかり、と見れば向かいの森の陰より一陣の人馬が現れ出て、行く手の道を遮り留め、先に進みし一人の勇婦は勇める馬を乗り据えて鐙踏ん張り大音上げて、

「岩居主従を絡め捕って都へ引きもて行く者は亀菊の雑掌たる似非女官らと見たるは僻目か。賤の砦にさる者ありと遠近人に知られたる病葉の夏楊ここにあり。岩居、渡橋をさぁ渡して、刃を受けよ」と呼ばはれば、その手の兵百余人が鬨をどっと作りつつ、まっしぐらに討って掛かれば驚き騒ぐ都の諸人は岩居、渡橋をうち捨てて、只蜘蛛の子を散らすが如くに駕籠かきらは駕籠を飛ばして命を限りにかき持て走り、犬蓼、稀籾、雑兵らも只逃げ道を求めるのみで田の畔畑の中をも厭わずに足に任して逃げ走るを何処までもと追っかけたり。

その時岩居主従はうち驚いたる心を鎮めて等しく辺りを見返るに、大箱を始めとして予て相知る岩飛葉ら、その余も勇婦幾人かが威儀を正して居並びたる。その中に大箱は琴樋、岩飛葉らに目を配して、まず岩居と渡橋の縛めの縄を解き捨てさせ、自ら立って主従を敷皮の辺に誘い、▼

「李野の刀自、いぶかしくも、さぞな驚きたまいけめ。今日しも亀菊の遣いとして都より斯様斯様の女官がこの地に到着して災い御身に及ぶ由を忍びの者が告げしかば、密かにここに下待ちして彼の輩を打ち走らして御身を救い取りしなり。京は更なり鎌倉も尼御台の政治、時政親子の沙汰として直からぬ事多くあり。まいて彼の亀菊が権をもて遊び、威に誇って、罪無き者を陥れる非道は人皆知る所、今更に云うべくもはべらず。生じいに道を守って無実の罪に身を殺さんより、我が砦に赴いて姫上に仕えたまえかし」と云うを岩居は聞きながら、

「私は心潔白にてちっとも犯せし罪が在らざるを今絡め捕られて都へ引き持て行かれるとも申し訳の立たざらんや。そを我れからに身を暗くして、なんでう謀反の輩と一列にしもなるべきや」と云う言葉未だ終らず、病葉の夏楊は手勢を従え帰り来て、さて大箱に告げる様、

「私は横折、捻金らを隙間も無く追っかけしに、奴等は逃げ足がいと早く行方も知らずなりはべり。只相従う雑兵を四五人討ち留めはべりしかども、数にも足らぬ者どもなれば斬り捨てにして首を取らず、そこより帰り参りにき」と云うに大箱頷いて、再び岩居にうち向かい、

「御身の心潔白にて犯せし罪があらずと云うとも、我々既に計らって彼の女官らを追い走らせ雑兵を討ち取ったれば、都に至っていかばかりに由を云い解きたまうともその言い訳を聞かれんや。まげて砦に赴いて、小蝶の刀自にも対面して、しばらく休息したまえかし」と云うに岩飛葉、夏楊らも又、諸共に進めて止まず、呉竹、桜戸、花的ら、その余の勇婦落ちも無く、一人一人に名対面していと懇ろに誘うにぞ、岩居は逃れる道無くて、遂にその意に任せつつ渡橋も諸共に大箱に従って江鎮泊にぞ赴きける。

〇さる程に小蝶らは大箱の凱陣を伝え聞きつつ山を下って、これを迎えて功を讃え、この日忠義堂に酒宴を設けて諸々の勇婦をねぎらい、早蕨を始めとして今参りの勇婦らに対面して盃をすすめ又、岩居、渡橋をも更にもてなし、大箱と諸共に「只此の所に留まって、三世姫に仕えたまえ」と言葉を尽くしてすすめれば岩居はしばしうち案じて、

「各々の志は黙止難くははべれども、李野には一人の叔母あり。又、母方の従姉妹女あり。これのみならず家の子（家臣）、眷属は私がここに留まれば、災い彼の身に▼及ぶべし」と云うを小蝶も大箱も諸共に押し止めて、

「その儀は心安かるべし。彼処へ人を遣わして、御身の叔母御一家の輩を皆一人として漏らす事無く、迎え取らせはべるにこそ」と云い慰めて、もてなす程に、摩利支天紺太郎は緞子の野袴、裾裂羽織の旅装束もいかめしく、岩居の叔母と従姉妹女とその余の者をも伴って、李野より帰り来て小蝶、大箱らにうち向かい、

「先に呉竹殿の謀り事に従い、それがし李野に赴いて岩居の刀自の一家の輩、並びに有り金、兵糧、武具、馬具、衣類、調度に到るまで車に積んで湖辺に出させ、そこより船に移し取り、この砦へ運び入れさせ、これより先に李野の掻き揚げ城※には火を掛けて煙りと成して候なり」と告げるに岩居は驚きながら叔母、従姉妹女らに対面して彼処の事を尋ねるに、その叔母、従姉妹女らが答えて云う様、

「先に御身が捕らわれて、渡橋と諸共に都へとて引かれたまいし後、又、使廳の司人が数多の組子を従えて宿所に来つつ、汝らも岩居に等しく召し取って都へ引かん、皆いでよと云う声さえもいかめしく追ったて追ったて将て行かれしを真に思いたりけるに、ここにて互いにつつが無く対面し

つる不思議さよ」と云うに岩居はいよいよ呆れて、又、問う由も無かりしを大箱さこそと笑いつつ、「岩居の刀自、悟りたまわずや。我々は予ねてより御身をいかで此の砦に留めんと思うにより、軍師呉竹の計略にてかたの如くに計らいにき。なお疑わしく思いたまえば彼の亀菊の使いととなえし女官女武者らに対面させん。人々早くいでたまえ」と云う声聞いて、次の間より立ちいづる四人の女は是すなわち▼別人ならず、亀菊の納女使い捻金、横折と名乗りしは女貞木袖垣、大和文字植梨なり。又、女武者犬蓼、稀籾の両人は傭針妙抜糸、聖小刀彫妙なり。およそこの四人の勇婦は江鎮泊に在って祝部の戦いに従わず、これにより去ぬる頃、呉竹の指図に従い、夏女が密かに砦へ帰り来て、件の四人を陣中に伴い行きしは後に至って此の偽使いに使うべき為にして、祝部、胡沙、李野の百姓どもにも面を見知られざればなり。されば岩居は大箱らがかくまでに心を用いて留めんと欲したる計らいに感服して再び否む事を得ず、遂に心を傾けて三世姫にぞ仕えける。

※掻き揚げ城（かきあげじろ）：土をかきあげて、手軽く築きあげた城。

〇その後に大箱は先に末広、河堀の親の蟹部の木工六に預け置きたる生け捕り胡沙丸を呼び出して、懇ろにいたわり慰め、又、瀬那遣の腐鶏を招き寄せて押し並べ置いて、さて云う様、

「瀬那遣の刀自は去ぬる頃、望月桂之介に心迷って彼を助けんとしたまいしを燕がいち早く桂を誅伐せしにより、その恨みに耐えずして討ち果たさんとせられし時に私はひたすら押しなだめ、此の後一人の美少年を選んで御身と夫婦にせんと約束したる事はべり。しかるにこの胡沙丸主は家柄と云い器量と云い桂之介に優れる事は玉と石との如くなるべし。胡沙丸主も此の婚姻を必ずな否みたまいそ。御身は祝部の熊姫と許婚の聞こえありと云えども、没落の日に彼の女は御身の母を害したり。かかれば永世たりとても、いかでか夫婦にならるべき。まいて世に亡き人なるをや、御身は今年十九才、腐鶏殿は四つ五つの姉にはあれども、世の中に年増の妻を娶りし者が子孫多きも少なからず。元より色を好むべき御身にあらねば、年増なりとて嫌うべくもあらずかし。この儀は予て小蝶の刀自とも談合したる事なるに、今日は黄道吉日なり。勇士と勇婦の妹と背は世に頼もしくいと目出度し。この儀を請け引きたまいね」といと懇ろにすすめたる人の真に胡沙丸は感服して一議に及ばず、遂にその意に任せしかば大箱も喜び斜めならず、すなわち蟹部の木工六と玉簾燕を婚礼の介添えとして、その日胡沙丸と腐鶏に盃を取り結ばせて幾万年もと寿きける。

これにより胡沙丸は額髪を剃り除いて、胡三郎三丈と名を改め、これより夫婦睦まじく共に三世姫にぞ仕えける。

さる程に江鎮泊に早蕨、岩居らの勇婦九人と紺太郎、胡三郎らの勇士両人を添えたれば、威風これより日頃に増して、雑兵、武具、馬具、兵糧まで物一つとして乏しき事無し。よって小蝶、大箱は諸勇婦の軍功を三世姫に聞こえ上げ、恩賞を申し行い、新参りの勇婦勇士らを見参に▼入れ奉っていと賑わしく日を渡るに、軍兵も多くなりしかば小蝶、大箱は呉竹、桜戸、味鴨らと談合し多く陣営を建て連ね、諸勇婦を分かち居らして、職を授け役義を守らせ、小蝶、大箱、呉竹、桜戸、味鴨、花的らは常に正殿にあり、三世姫を守護し奉り、又、二網、五井、七曲、横鯛、下貝、琴樋、末広、河堀、日熊、龍間は船手の大将として水軍を司らせ、植梨、彫妙には文書の事を司らせ、抜糸をば縫い殿の司として鎧、垂衣、旗、幕なんどを縫いいださせ、袖垣には賞罰を司らせ、夏女には遠方の使者を司らせ、岩居、月二子には金銀兵糧を司らせ、富崎、園喜代には酒宴の事を司らせ、曳尾、千垣には城柵の作事を司らせ、この余の秦名、力寿、彩雲、黄葉、真弓、杣木、朱西、白粉、

燕、腐鶏、雌雉、薄衣、筒鳥、石竹、枸橘、大鳥、涼風、山桃、夏楊、岩飛葉、飛子、沖津、渡橋、幸目、狩倉、早蕨、照鷽、古雛、雛形、新玉、早潮、並びに胡三郎、紺太郎らは或るいは左右の陣営を守り、或るいは湖の辺にいでて、各々司る所あり。互いに良くその役義を守って等しく忠義を尽くしけり。

されば始め胡沙丸が生け捕られたりし頃、大箱これを木工六に預けていたわらさせたりければ、人皆その胡沙丸をば大箱が男妾にすべき下心なるべしと思う者多かりしに、さはあらずして腐鶏と夫婦になして前約を違えざりける心の真を今更感ぜざる者無く、いよいよその徳を慕って山陣長く治まりけり。

〇かかりし程にある日朱西が酒店より直蔦の稲妻が来たまいにきと告げしかば、小蝶、大箱、呉竹らは躍り上がりつ喜んで、「彼女は命の恩人なり。いざ立ち出て迎えん」とて山を下らんとする程に、稲妻は早朱西の手の者に送られて賤の砦へ来にければ、小蝶、大箱、呉竹は二網、五井、七曲、白粉らと諸共に様々にもてなして、絶えて久しき情義を述べ、古りにし恩を喜び聞こえて朱良井の安否を問うに稲妻答えて、

「篠芒は主君判官殿の心に叶って出頭して勤めはべり。私は此の度、信濃路へ御使いを承りし帰路にははべれども、供人らは腹心の下部にてはべるから道のついでに掛け寄りはべり」と云うに皆々喜んで、この夜はここに押し留め、全て砦の勇婦らを引き合わせつつ酒宴を設けて夜すがら語らい明かす程に、小蝶、大箱、呉竹らはひたすらに説きすすめて、「願うは砦に留まって、三世姫に仕えたまえ」と言葉等しく云うと云えども稲妻は頭をうち振って、

「各々方のお心栄えは喜ばしうはべれども、私が今故も無く主君に背くは是不義なり。折もあれば又、来つべし。此の度は主君の使いに出たる旅にしあれば一日も逗留はなり難し。明日はつとめてまかりてん。この儀を▼許したまいね」と言葉を放ちて否むにぞ、小蝶、大箱、呉竹らは遂に留める事を得ず、その明けの朝に餞の金五十両を贈りつつ皆船場まで送りけり。

さる程に稲妻は江鎮泊を立ち離れ、しきりに道を急ぎしかば、僅かに三日四日ばかりにして難波に帰って、しかじかとその主用の返り事を主君天野の判官遠光に聞こえ上げ、やがて宿所に退いてしばらく休息する程に、ある日徒然なりければ下部一人を従えて漫ろ歩きをするままに、嬬根と云える女に会いけり。彼女は筑紫琴を人に教えて生業にするなるが予て相知る者なれば、佇みつつ安否を問うに嬬根が云う様、

「御身は旅より帰らせたまいて、まだ程も無き事なれば、皆之丞をば見たまわじ。近頃垂霜皆之丞と呼ばれる色子が母親と共に都より来て、しかじかの小芝居にて日毎に舞い踊りはべるが、良しと云う評判高かり。今より行って見たまえかし」と進めて、やがて立ち別れ、その指す方へ急ぎけり。

その時稲妻は思う様、

「・・・・・こういでたれど興も無し。供人をばしかじかの所へここより遣わして、物を買わせて帰り来つべき。その頃まで、我が身一人でその踊りを見べけれ」と思案をしつつ供人にはしかじかと云い付けて、そこより物を買いに遣わし、その身はやがて皆之丞の芝居に至って舞台に近き宜しき所に座を占めつつしばらく踊りを見る程に、既に踊りは始まって、彼の母親は鼓を鳴らし、皆之丞は鼓に合わせて舞踊ること半刻ばかり、見る者ややと誉めぬは無く等しく興にぞ入りにける。

かくて踊りも果てしかばその母親は諸人にうち向かって、

「私親子はお贔屓方の招きによって都より此の度、当所に参りたり。太夫はすなわち我が子にて、垂霜皆之丞、すなわち是なり。私は伏屋と呼ばれる者、長く御目をたまわって、多少によらず踊りの花を取らせたまえ」と呼ばはるにぞ、皆之丞は座を立って、まず一番に稲妻の辺に来つつ花を請うに稲妻は忙わしく懐をかき探れども折から銭は無かりけり。

この故に稲妻は皆之丞に向かって云う様、

「お足（銭）は供人に持たせしが、道より物を買わせんとて余所へ遣わしたれば未だ来ず。されば私が懐に持ち合わせたるお足無し。彼の供人が帰り来るまで今しばし待ちねかし」と云うを皆之丞は真とせず、顔うち守りあざ笑い、

「御身は間近く良き場に居まして飽くまで見物したまいながら、お足は供人に持たせしがその者が未だ来ねば、しばらく待てと宣うとも、いつまでか待たるべき。花は御身が始めなるに、まず御身よりたまわらずば人皆それを例にして誰かは物を取らせたまわん。空言ををのみ云わんより、さぁさぁ花をたまわらずや」と云われて稲妻は顔うち赤めて、

「我いかにして欺くべき。▼従者だに帰り来れば、人より多く花を取らせん。まげてしばらく待ちねかし」と云うを皆之丞は聞かずして、なお争わんとしてけるを伏屋はヤヤと押し止めて、

「やよ、皆之丞、惜きね、おきね。うたてや見掛けに似気も無く人悪き女中の為にあたら言葉を費やすは世渡りの邪魔ぞかし。銭無き者は施して見せるも今日の功徳にならん。やよ浮々と近付いて、腰巾着をな切なれそ」と、あくまで狭み（見下す）する老女の悪口を聞くに得耐えず稲妻は舞台の上に躍り上って、伏屋をはたと睨まえて、

「河原婆めが何をか云う。私を指して盗人になぞらえ云いしは聞き捨てならず。今一言返して見よ。息の根止めん」と息巻いたる勇婦の怒りにちっともひるまず、

「あな猛々しき女中かな。銭もあらずに飽くまでに見物したれば、ここらで嫌う油虫にあらざらんや。しかるも虫と云われぬはなお幸いとは思わずに言葉咎めをすればとて、恐れる者は絶えて無し。さぁさぁ出て行かずや」と唇薄き当座の過言に稲妻は今はこらえかね、罵りながら足を跳ばして、たちまちはたと蹴たりしかば、伏屋は一ト声「あなや」と叫んで仰け反り倒れて、「やよ、人殺し、人殺しよ」と叫ぶにぞ、人皆等しく立ち騒ぎいで稲妻を取り留め、或るいは伏屋を助け起こしていたわりつつ慰めたる事の騒ぎに興醒めて、この日の踊りは果てにけり。

傾城水滸伝　第十一編ノ四　曲亭馬琴著　歌川国安画

されば直鳶の稲妻は一朝の怒りに任して伏屋をひどく蹴倒したる事の騒ぎに諸人は等しく群立ち悶着して、或るいは稲妻を押し止め、或るいは伏屋をいたわりなだめて事ようやくに鎮まりけり。

これにより稲妻は供の下部が来ぬるを待たず、そのまま宿所へ帰りけり。さる程に伏屋、皆之丞は稲妻に蹴られたる憤りに耐えざりければ、次の日に事の趣を当国の領主天野の判官遠光にぞ訴えける。しかるに垂霜皆之丞は今より四歳ばかり先つ頃も都より此の難波へ来てしばらく生業をせし事ありけり。その折に遠光は密かに皆之丞を呼び寄せて舞い歌わせなどしつつ、酒の相手にしたりける古き色情あるにより、その事の訴えをうち聞きしよりひどく怒って、

「稲妻は我が家の女武者なりと云うとも、主の威光を笠に着て、皆之丞の技芸を見物せしのみならず銭を取らせず非を理に為して皆之丞の母伏屋をさえうち倒せしは言語道断、非道至極と云いつべし。早く稲妻を絡め捕り、皆之丞の芝居へ引いて行きつつ舞台の柱へ繋ぎ置き、一日人に見せしめてその後追放いたすべし」といと厳かに下知するにぞ、その手の雑兵は心を得て、かたの如くに取り計らい、すなわち稲妻を縛めてその芝居へ引きもて行きけり。

この時稲妻に母親あり。先にその父が世を去りし時に剃髪して法名を妙雲と呼ばれしが、我が子はしかじかの事により、たちまちに絡め捕られてあまつさえ皆之丞の芝居へ引きもて行かれるを留めかね、うち嘆いて後を慕って走り来て、され両人の雑兵にうち向かって涙を留めて、

「各々何と思いたまう。▼稲妻が一旦の怒りに任して人を討ちしは元より女に相応しからぬ過ちではべれども、事の邪正も正したまわで、只片言なる彼ら親子の訴えを受け入れて、ここに引かして諸人に見せて追放せられんとは世にあるまじき御計らい。心得難き事になん。よしや役義は軽くとも殿に仕えて武士の下に連なる女武者をかく恥ずかしめたまわれれば、我々親子の恥のみならず、又、これ上の御恥辱。身内の者を技芸らに思い替えさせたまいしは、いとはばかりなる事ながら御過ちにあらざらんや。これにより稲妻の縛めの縄を許して、私を上に、ともかくも取り計らわせたまえかし。この事いよいよ憎しとて、親子の頭を召されるともここにて一日人に見られる恥ずかしめには優るべし。やよ、なうなう」とかき口説く道理に賢しき老母の願事は道理なれば、雑兵らは否みかねつつ答えは得せで、只聞きながらいたりしかば、妙雲いよいよ耐えかねて手づからやがて稲妻の縛めの縄を解きにけり。

その時垂霜皆之丞は怒れる声を振り立てて、

「この死にさがりの比丘尼めが、上より仰せ付けられて見懲らしになさせたまう罪人を己が自由に解き許す法やある。守りに付けられて来たまいたる兵たちはおめおめと、うち眺めていたまうとも、訴え人が許さぬぞ。覚悟をせよ」と罵って拳を上げて走り掛かって、妙雲の剃りたての頭をはたと打ちしかば、稲妻はすかさず皆之丞をかい掴んで力に任して礫の如く投げ除けたる。勇婦の勢い留めあえず、皆之丞は舞台の柱に頭をだうとうち破られて、またたく隙に息絶えけり。

今この事の有様に伏屋は驚き且つ怒って、「我が子の敵逃さじ」と呼び張りつ猛り狂って、又、妙雲を引き捕らえてうち倒さんとしてけるを稲妻すかさず又、かい掴み、左手へだうと投げ除けけり。雑兵らは此の体たらくにひとしく驚き騒ぐと云えども、既にして皆之丞は投げ殺されたる事なれば議論に及ぶまでも無く、又、稲妻を縛めて更に伏屋を相伴い、妙雲をも引き立てて城中に帰り来て、すなわち事の趣を遠光に訴えけり。

その時天野の遠光は事の由を聞きながら怒る事はなはだしく、まず稲妻をば牢屋に繋がせ、その母親妙雲をそのまま宿所に閉じ込めて、伏屋を懇ろにいたわり慰め、皆之丞の亡骸は伏屋がまにまに葬らせ、その後篠芒朱良井を呼び寄せて云う様、

「稲妻は法に違いて、あまつさえ皆之丞を殺したれば、その罪最も軽からず、縛って首を刎ん事はもちろんの儀なりと云えども、国々なる領主として女武者を召し置く事はこれ私の計らいならず、元は都の沙汰として院の御好みによるものなれば、よしやその罪ありと云うとも女武者の稲妻は我が私に誅し難かり。これにより彼女ら親子を汝が都へ引き持て行って、六波羅の総監の伊賀の判官光季に引き渡し、彼処の決断に任すべし。まずよく▼この儀を心得て、さぁさぁせよ」と云い付けて、すなわち六波羅へ送り遣わす書状一封を渡せしかば、朱良井は異議も無く言承けしつつ退

いて、かたの如くに用意をしけり。
かくてその明けの朝に獄司は牢屋の内より稲妻を引き出して、重さ五六斤ある首枷を掛け、そのまま朱良井に渡すにぞ、朱良井これを受け取って、稲妻の母妙雲をはんだ乗り物にうち乗せて、これを三人の下部にかかせて、雑兵二人を相従えて都を指して発ちいでけり。
さる程に稲妻親子は朱良井らに送られて、その日未の頃おいに森口の里まで来る時に朱良井はいと甚う俄かに足の痛むとて、ややもすれば遅れにければ、しばしはここに憩わんとて里外れの旅籠屋に立ち寄り、奥まりたる座敷を借りて、そこにて休息する程に思うにも似ず日は傾いて七つ下がりになりにけり。
その時朱良井は二人の雑兵らに云う様、
「今朝しも遅く発ちいでたるに、足の痛みがまだ癒えねば今日は都に入り難し。今宵はここにて一夜さ明かして、明日とく六波羅に到るべし。罪人をば我が守らんに御身達は風呂にも入って、心長閑く休らいたまえ」と云うに皆々喜んで、やがて稲妻と妙雲を朱良井の辺に在らしめ、その身は湯浴みをしつつ夕膳をもとく食べて何処にか行きたりけんか奥座敷には居らざりけり。
その時朱良井は稲妻親子に囁く様、
「人を殺せば身も殺されるは、なべての法度にはべれども、貴賤各々その品あって、その罪も又、等しからず。例えば皆之丞は技芸なり。御身は元より武家に仕えて女武者の事なれば、よくその意趣を問い正し、取り計らわるべき事なれども、主君の為に男色の旧情ある者なれば、邪正も尋ねず片手打ちなる御計らいとぞ思いはべる。かかれば明日六波羅へ引き渡されて、後の裁きも凶多くして吉少なくて露命を保ち難かるべし。さぁ此の隙に母御と共に跡を埋め逐電して、江鎮泊へ赴きたまえ。彼処の大将小蝶、大箱の二人の刀自は受けたる恩があるなれば、喜んで留むべし。やよさぁさぁ」と急がしたる人の真を妙雲は答えも得せずうち泣くのみ。稲妻はつくづくと聞きつつ頭をうち振って、
「年頃親しき同役の好とは云いながら、思うにましたる御身の義心。▼只感涙の他ははべらず。さればとてその意に任して我々親子を逐電させれば、その罪御身に及ぶべし」と云うを朱良井は聞きながら、
「その儀は心安かるべし。私が御身を取り逃がせしとて、その罪は命に及ばんや。重くは流罪、幸いに軽くは追放せられんのみ。且つ御身には母御あり、母御の罪は軽くとも御身が命を失なえば、誰が親を養うべき。私には親姉妹無し。一旦罪を被るとも赦免の時節なからんや。由無き口誼に時を移せば我が志は仇とならん。早く立ち退きたまいね」と言葉を尽くして進めるにぞ、妙雲も稲妻も只感涙のすすむを覚えず、「かくまでに云われるを否むべきにあらず」とて遂にその意に任せしかば、朱良井も又、喜んで、まず稲妻の首枷を手早く外して用意の路用を紙に包んで渡しけり。稲妻はその金を受け戴きつ、親と子が再び生きる厚恩のその喜びを述べる間も無く、母を背負って忙わしく裏道より抜け出て江鎮泊を指して走りけり。

かくてその夕暮れに二人の雑兵、駕籠の者らは何地よりか帰り来て、奥の座敷に行きつつ見るに朱良井はうたたねして人の来るをも知らず居り。又、稲妻と妙雲がその辺に在る事無ければ、「此はいかに」といぶかって、まず朱良井を呼び覚まして彼女らの事を尋ねれば、朱良井は辺りを見返りひどく驚きたる体にもてなし、

「我れ稲妻とは此の年頃同役でありしかば、心を許して思わずもうたたねをせし隙に親子諸共に抜け出て逐電せしに疑い無し。さればとて宵闇なるに追うとも見定め難かるべし。月の出るを待つこそ良けれ」と云いこしらえて時を延ばし、その夜亥中の頃に至って、今は早稲妻親子は遠くも走りたりけんと思えばやがて手分けをしつつ、その終夜に尋ねしかども得追い付くべき由の無ければ、次の日難波へ立ち帰り、すなわち主君遠光に稲妻親子を取り逃がしたる事の由を訴えけり。これにより遠光は朱良井を召し出して事の趣を尋ねるに、「只これその身の油断によって、事のここに及びし」と云うのみ、悪心ありとも聞こえぬに、元より愛する朱良井の事にしあれば深くも責めず、只しばらく閉じ込め置いて許さばやと思えども、伏屋はこの儀を伝え聞き、又、訴え出て申す様、「朱良井は稲妻と此の年頃同役にていと睦まじけりければ、これかれ密かに示し合わせて取り逃がしたる体にもてなし放ちやりしに疑い無し。▼さるを彼女が申すに任して、その罪をしも正したまわで許したまうものならば、私は六波羅へ赴いて直訴をせん」と云うにより遠光これに迷惑して、「しからんには是非に及ばず。朱良井を縛めて、早く都へ送り遣わして彼処の決断に任せん」とて、更に又、朱良井の過ちの由を書き記し、此の度は人数多付け遣わして六波羅へぞ引き渡しける。

〇さる程に六波羅の総監の伊賀の判官光季は天野の遠光の送り状を見て、まず朱良井を受け取らせ、その後朱良井を局の内へ呼び入れて、罪人稲妻親子を取り逃がしたる事の体たらくを尋ね問いて、「汝は元より稲妻と同役なりし好を思って、密かに彼女ら親子の者を放ちやりしにあらずや」と再び問えば朱良井答えて、

「いかでか人を救わんとて、身の罪を返り見ぬ事をしも仕らん。私の足が俄かに痛んで、道去りあえぬ油断によって思わず彼女らを走らせたり」と云うに光季頷いて、まず朱良井を牢屋に繋がせ、その後稲妻の姿画をもて国々に触れ知らしめ、その行方を尋ねる事は半年余りに及びしかども、絶えて在処が知れざりければ、遂に朱良井の罪を定めて佐渡の国へ流しけり。

〇されば又、この時佐渡の領主なりける本間の太郎兼照は此の度六波羅より流されたる朱良井と云う罪人は元これ難波の者にして、天野の遠光に仕えたる女武者なりし事、武芸力量類い稀なる勇婦たる事までも世の風聞に予ねてより伝え聞いたる事あれば、召し使えばやと思いつつ、或る日朱良井を召し寄せて、犯せし罪の趣を懇ろに尋ねしかば、朱良井はちっとも隠さず、過って稲妻親子を取り逃がせしと云う事の由を斯様斯様と告げしかば本間の兼照は頷いて、更に又、彼女の素生を尋ねんと思う折にたちまち屏風の後ろより幼き若殿が走り出て、朱良井をと見かう見つつ、いと笑ましげに辺に近づき、「やよ、婆よ。抱かれん、抱け抱け」と云いしかども朱良井ははばかって手をも出さずにありけるを兼照は見つ微笑んで、

「朱良井、彼は我が一人子にて、若丸と呼ばれたる。今年は四歳になるものながら、その年の冬に生まれしかば世に云う年弱なる者ぞ。いささかも厭わしからず、抱けと云われば抱けかし」と云われて朱良井は否むに由無く、やがて若丸を抱き上げて様々にあやすにぞ、若丸いよいよ喜んで外の方へいでよと云う。兼照は我が愛子がかく朱良井に早く馴染んで得放さざるを見て、喜ぶ事大方ならず、又、朱良井にうち向かって、

「若が外の方へいでよと云えば、彼がまにまに遊ばせよ。折々門外へ出す日は乳人は更なり、老兵らを侍けて使わせども、汝は勇婦の聞こえあり。武芸、力量二つながらも男勝りでありとし聞け

ば、人数多付けていださんより汝一人が守りしてあれば、よしや幾度門前へ出ると云うとも後ろ安かり。今後もかかる事あればその度毎に告げるに及ばず、汝がまにまに遊ばせよ」と云うに朱良井心得て、さて若丸を抱きしままにそこら一辺うち巡り、一時ばかり遊ばせて、やがて乳人に渡しけり。

是よりして若丸は朱良井をしばしも離さずに折々負われていでしかば、乳人も近衆の老兵も始めの程は朱良井の尻に付きつついでもしたれど後にはようやく怠りて、▼朱良井にのみ任せつつ、暇ありとぞ思いける。この故に朱良井は女どもの起き臥しする局の末に部屋をたまわり、明け暮れ若丸に侍づいて半年余り在りける程に、ある日その辺りの鎮守祭りの宵宮なりとて、いとひどく賑わしかりければ、朱良井は若丸をかき抱いて行って見せばやと思いつつ、乳人と例の老兵を尋ねるに何地か行きけん出て来ず。若丸は「さぁ行かん」とて、ひたすらにむずがりければ止む事を得ず、その身一人若丸を背に負って門外に走りいで、或るいは幟、花灯籠、あちこちの飾り物を飽くまでに見せる程に、早夕暮れになりしかば立ち帰らんと思う折に後ろの方に人あって朱良井の袂を引きけり。

朱良井これに驚いて急に後辺を見返るに、これすなわち別人ならず思い掛け無き稲妻が密かに尋ねて来るなり。此は大胆やとばかりに肝を潰しつ口をつぐんで、引かれるままにそこを退き、かけ離れたる裏町の相川橋の辺に赴き、さて若丸を下ろし置き、まずその安否を尋ねるに稲妻答えて、「然ればとよ。私は御身の教えに任して、母諸共につつが無く江鎮泊に赴いて、小蝶、大箱、呉竹の刀自、その余の勇婦たちにも対面して、私親子の逐電の事の元末を物語り。並びに御身の義心の趣を事つまびらかに告げしかば、小蝶、大箱の刀自たちは諸勇婦と諸共に私親子を慰めて、そのもてなし大方ならず。その後三世姫上の見参に入れられて、遂に一方の大将にさえさせられたり。しかるに彼の刀自たちは御身が必ず私の為に罪を得たまわん事を恐れて、難波は更なり都へも忍びの者を遣わして安危を探らせたまいしに、私が行方知れざるにより御身は六波羅の沙汰として、この地へ流されたまいし由を事ようやくに聞こえしかば、小蝶、大箱の刀自は談合して、御身を砦へ迎え取り、昔の恩義に報わんとて、すなわち私に呉竹の刀自を差し添えて密かに遣わしなり」と云うを朱良井聞きながら、

「彼の人々の志は喜ばしくはべれども、我が身はこの地へ流されしより領主本間殿の心に叶って、かく若殿の守りに付けられて人並に勤めはべるに、今その恵みを仇にして逐電して何処へ行くべき。その儀はつやつや従い難し」と答える隙に呉竹が物の陰より出て来て朱良井に対面し、つつが無き喜びを述べて、又、説き進める様、

「御身は一世の勇婦として、▼流人となって人の下にあたら月日を送らんや。小蝶、大箱二人の刀自も此の事をのみ云い暮して、つま立って待ちたまうなり。よって私と稲妻殿を迎えの為に来されしを徒には帰り難し。まげて近江へ赴きたまえ」と云うに朱良井は聞きながら、

「今二方の意見の趣は聞き分けざるにあらねども、私はさせる罪もあらず、一旦この地へ流されるとも遂には赦免に会う日もあって、故郷へ立ち帰り、始めの如く主君に仕えて一期を目出度く過ごすべし。まいて当国の守に御座する本間殿の浅からぬ恵みを今更仇にして、只義に背き恩を忘れて謀反の群れに入るべきや。この儀ばかりは弁に任して進められるとも請け引き難し。稲妻殿はこと更に世をはばかるべき人なるに、長物語りは災いを求める仲立ちならん。さぁさぁ帰りたまえかし」と言葉を放ち固く否みて初めて後辺を見返るに、若丸は何地か行きけん、そこらに見えずなりしか

ば朱良井はひどく驚き騒いで、
「そも若様は今の間に何処へ行かせたまいけん。物語らいにかかづらいて油断せしその隙に川にははまりたまわずや。心元無し」とばかりに立たまくするを呉竹は忙わしく引き止めて、
「やよ、さのみな逸りたまいそ。此の度我々が江鎮泊より伴い来る一人の勇婦に旋風力寿と云う者が先より物の陰に居り、いと気早なる性なれば、我々がすすめる由に御身に従いたまわぬを立ち聞きして心苛立ち、彼の若殿をかきさらってうち捨てたるか殺せしか、これも又、計り難し」と云うに朱良井、且つ、怒り、ますます慌てて、又、更に問答の暇も無く、「そは一大事になりにけり。遠くは行かじ」とばかりに行方何処と白波や河原に沿ってぞ追いたりける。

〇かくてその日は暮れ果てて月は隈無く照らせども、心の闇に分く由も無き朱良井は只狂気の如く奪い取られし若丸を尋ねる事一ト時余り、しきりに走り巡れどもそれかと思う人にも会わず。されば呉竹、稲妻に再び問わんと思えども、彼女らは旅宿に帰りけん。これさえ行方知れざりければ心ますます苛立ってなおあちこちと尋ねる程に、一ト群繁き木の陰に憩い居る人ありとおぼしく此方をうかがう様なれば、走り近付かんとする程に現れいでしは別人ならず是すなわち力寿なり。木霊に響く声高く、
「朱良井などて悟らずや。和女郎は呉竹殿の勧めを否みて伴われじと云うにより、その妄念を断たん為に私は彼の幼子をかきさらい密かに川へ投げ捨てたり。後に証拠を見せんと思うて上衣ばかり剥ぎ取って、今もなおここにあり。かかれば和女郎は帰る道無し、迷いを醒まして我々と共に近江路へ行きねかし。疑わしくはこれを見よ」と云いつつ彼の若丸の上衣を取り出して、月下にかざして見せしかば朱良井は恨みに耐えずして眼を怒らし歯を食いしばり、
「残忍無惨の賊婦の振る舞い、和子の仇、逃しはせじ」と息巻き猛く罵って、腰に差したる若丸の守り刀を討たんと進むを物ともせざりし力寿は斧にて受け止めて、且つ戦い且つ走るを何処までもと追う程に早幾十丁か来るを知らず、と見れば向かいに大屋敷あり。力寿は既に此の屋敷の門内へ走り入ってたちまち見えずなりけるを朱良井も又、引き続き、その屋敷に追っかけ来て、慌ただしく音ないて、
「私は仇を追う者なり。しかるに彼の仇敵はここの門内へ走り入りしをしかと見留めはべりにき。さぁさぁいだしたまえかし」と云うを取次ぎ人は心得て、まず玄関に待たせ置き、しばらくして又、出て来て、
「御口状の趣を主人に申し聞かせしに、御目にかからんと云われるなり。まず此方へと案内をしつつ書院にぞ伴いける。しばらくしていと臈たけたる一人の婦人がたち出て朱良井に対面して、御身の尋ねたまう勇婦は此方へ来るに相違無し。しかれども此の年頃に私が一旦頼まれて、匿いしその人々を官府なりとも渡せし事無し。▼他に会わせる人はべり。まずまず休息したまえ」と又、他事も無く答える程に呉竹と稲妻も奥の方より出て来て、両人ひとしく慰めて、
「篠芒の刀自、御腹は立たんが力寿の心一つもて彼の若殿を奪いしにあらず。御身は最も義を守る性なるにより我々の勧めに従いたまうまじと予ねてより思いしかば、密かに力寿に心得させて、かたの如くに計らせたり。罪はかく云う呉竹にこれありと云うと云えども、いかで御身を賤の砦へ伴わんと思う真心より為せし事なり。願うは宿念を翻し、小蝶、大箱二人の刀自の懇望に従いたまえ」と云うを朱良井聞きながら、

「よしや若丸を失わせしは呉竹の刀自の密計なりとも、力寿に仁義の心があればいかでか川へ沈めんや。かかれば恨みは力寿にあり。さぁさぁ彼奴を出したまえ。そもそもここは誰の屋敷にて、主人は何と呼ばれるやらん」と問えば呉竹は微笑んで、
「主人はすなわちこの女中にて、世の中に隠れなき折瀧の節柴の刀自にこそはべるなれ」と告げれば朱良井はかたちを改め、
「さては年頃伝え聞いたる節柴殿の屋敷なりしか。世の義の為には財を惜しまず、人を救うて世の中の義婦勇婦と交わりを結びたまうという由は私も知らぬにあらねども、力寿の事は格別なり。かくてもいだしたまわずば是非に及ばず奥に踏み込み、家探しをして引ずり出さん。さでも匿いたまうや」と息巻き責めて果てし無き、事の様子を立ち聞きしたる力寿は斧を引き下げて次の間より現れいで、
「こな朱良井めが、情の剛さよ。若丸とやらんを物せしは呉竹殿の指図にて我が身一つの計らいならぬに、聞き分けも無く私を憎まば望みに任して勝負を決せん。覚悟をせよ」と罵れば、朱良井いよいよせき立って、「云うにや及ぶ」と刃を引き抜き、斬り結ばんと走りかかるを呉竹、稲妻が押し隔て、力寿を叱りつ朱良井を様々になだめれば、節柴も又、朱良井にうち向かい、
「先に彼の若丸殿を力寿が奪い盗ると云えども、川へ沈めしと云いつるは御身が主家へ帰り難き心を決せしめん為なり。真は呉竹、稲妻が私の屋敷へ抱き来て、事の心を告げられしかば、すなわち私が人両三人に彼の若丸を送らして本間殿へ遣わしたり」と云う言葉未だ終らず、その遣いにたてられたる老僕両人が下部と共に本間の館より帰り来て、兼照の返簡を節柴に渡して云う様、
「我々は仰せに従って本間殿の屋敷に赴き、先にこの幼な子が門前に迷い来てひどく泣き候いしを内に入れていたわりしに、知る者あって此の迷い子は殿の御愛子ならんと云えり。虚実は定かならねども、時を移さず人をもて見せ奉るものなりと御口上を演説して、御消息（手紙）を参らせしを彼処の主従は愛でくつ返って☆、その喜びは例えるに物もあらず、さて本間殿の御返り事に、此の幼な子は紛れも無き我が子若丸にて▼候なり。先に朱良井と云う女がかき抱きていでたる由、日は暮れたれども帰り来ねば、あちこちへ人を出して尋ねさせたりけるに、あにはからんや若丸はそこの門前へ捨てられしをうちも置かれずいたわって早く送り来されし事は喜悦の至り、かたじけなし。彼の朱良井は流人なりしをなまじいに取り上げて、我が子にかしづけたりけるに、旧情未だ改めず、我が子を捨てて逐電したるはいと憎むべき曲者なり。彼奴の行方を狩り求め、八つ裂きにして腹を憩ん。この儀も宜しく伝うべしと御答えの候いき」と告げるに節柴頷いて、老僕らを退かせて兼照の返簡を朱良井に見せて云う様、
「見たまえ若丸殿はつつが無く、既に本間へ送ったり。さればとて今更に御身は彼処へ帰るに由無く、呉竹殿がかくの如く計らいしは別儀無し。御身を砦へ伴わんと思う実意よりいでたるを察して請け引きたまえかし」と言葉を尽くしてすすめしかば朱良井は頭を傾けて、
「幸いにして若殿につつが無しと云うと云えども、我が身の進退極まりぬ。かかれば各々の勧めに従い、ともかくもすべけれども心憎きは力寿なり。彼奴も私と諸共に近江へ帰る者ならば、私は決して江鎮泊へ行く事を諾がはす。この儀を計らいたまわんや」と云うに力寿はひどく怒って、
「朱良井、汝は何者なれば、今より私を追い失って江鎮泊へ行かんと云うや。その儀ならば我も許さず。さぁさぁ勝負を決せよ」と狂うを呉竹、稲妻は又、ようやくに鎮めけり。
　その時節柴は思案して、旋風をばなおしばらくこの所へ残し置き、呉竹、稲妻二人の刀自は朱良

井殿を伴って早く近江へ帰りたまえ。さる時は朱良井殿の云い條も立つべきなり。かくて日頃を経たらんには怒りも遂に収まって互いに無事にならざらんや。その頃合いを考えて、後より力寿を帰すべし」と云うに呉竹は喜んで、すなわちその意に任しつつ力寿はここに残し置き、いつまでも帰されずは障りはあらじとて、皆朱良井をなだめしかば朱良井ようやく頷きけり。

これにより呉竹、稲妻は朱良井を伴って、その明け方に発ちいでつ、澤戸の浦より船に乗り越前までとて急ぎけり。

〇かくて力寿は節柴の家に在ること既に早、五六十日に及びし頃、ある日越前の国府の城下より飛脚が到来して、節柴の叔父藤原正名と云う者の病気の由を告げにけり。事の由を尋ねるに正名は節柴の母方の叔父にして、是すなわち南家の儒者なり。もとは都にありけるが平家が滅び失せし頃、越前へ退隠してちとの庄園を贖い求め、築山泉水を庭に造って、こと閑雅にぞ住まいける。しかるに越前の新国司綾重は亀菊の従兄弟なり。これにより成り出て近頃国司となりしより権威をたくましくして民を虐げ、萬に非法多かりけるに、近頃又、その親類と聞こえたる▼大虫猛者平寅武と云う剣術使いを呼び下し、すなわち彼を眼代として重く用いたりしかば、猛者平も又、権威を振るって、おのがままにせざる事無し。かかりし程に猛者平は藤原の正名の家は造り様よろしく庭なる築山泉水の類い多からぬを見て、奪い取ってその身の宿所にせばやと思って、家を買わんと云うと云えども正名はこれを請け引かず、「それがしが年頃心を用いて造り成したる此の家をいかでか人に売るべきや」と云うを猛者平は聞きながら、

「例え由ある家なりとも、我が望みに背く者は国司の下知に背くに同じ。異議に及ばば思い知らせん。覚悟をせよ」と罵るを正名はちっとも恐れる事無く、

「よしや国司の御下知なりとも、佐渡の節柴は平の頼盛卿の後にして、それがしが姪なり。鎌倉殿より永代不朽の御行書をたまわって、その庄園を冒す事を許されず、この家は節柴が造ってそれがしに住まわしめるものなる由を知りたまわずや」と云われて猛者平は怒りに耐えず、事を左右に託つけて、「我が意を拒む不敵の戯言、息の根止めん」と罵って、腰に差したる鉄扇で正名をはたと打ち倒し、「今日よりして十日の程に此の家を渡すべし」とおごそかに日を限り、その日は宿所へ帰りけり。

されば正名は七十路余りの老人の事なるに、猛者平にひどく打たれて是より病の床に臥したり。よって節柴を呼び迎えて遺言せばやと思いつつ、俄かに飛脚を起こせしなり。

節柴はこれに驚き憂いて、由を力寿に物語り、明日は努めて船路より越前へ行かんと云う。力寿はこれを聞きながら、「しからんには私をも伴いたまえ」と云うにより、節柴はすなわち力寿を具して供人七八人を相従えて、次の日海船にうち乗って越前の国府に赴いて、叔父の安否を問いにけり。

正名の妻は世を去って、一人の側女と両三人の奴婢が家に在り。その時正名は節柴を病床に招き入れ、さて猛者平の非法の趣、且つ猛者平に打たれたる体たらくを告げ知らせ、

「我が身は譲るべき子が無ければ、家は更なり庄園を菩提所へ寄進すべしと住持に約束せし事あれば、我れ死するの後しか計らって猛者平にな奪われそ」と事落ちも無く遺言して、その夜空しくなりにけり。

節柴は悲嘆に耐えざりしをさてあるべきにあらざれば、野辺送りはかたの如く、後の事を取り行

ってすなわち叔父の亡骸を菩提所へ葬りけり。かくてその次の日に大虫猛者平寅武は組子五六人を従えて再び正名の宿所に来つつ、家を渡せと催促せしを節柴が立ち出て対面し、叔父の正名が身罷りし▼事の由を述べ示し、且つ遺言あるにより家は余人に渡し難しと否むを聞かず猛者平は権威に任せて節柴を絡め捕らせんとしたりしかば、次の間に立ち聞きしたるカ寿はこらえず走り出て、組子をささえて投げ退けて、しきりに猛り狂いしかば、猛者平は驚きながら刀を抜いて打たんとせしをカ寿は早く身をかわし、すかさず刀を奪い取り、ひるむを得たりと猛者平を唐竹割りに斬り倒せば、いよいよ騒ぐ組子どもは皆々ひとしく逃げ失せけり。

［作者曰］この大虫猛者平は剣術使いなりとあるに似気なく、カ寿に刀を奪い取られて、只一打ちに切り殺されしは相応しからぬ様なれども、総て悪人の命運尽きる時、かかる事ままあり。その剣術をもて論ずまじき事になん、此の一段は末つまって文段疎漏☆なり。今説き漏らせし事どもは第十二編を著す日に再びこれをつぶさにせん。見る人宜しく察すべし。目出度し、目出度し。

＜翻刻、校訂、翻訳中：滝本慶三　禁転載　底本／早稲田大学図書館所蔵資料＞